

添へ其町村衛生委員へ届出へし

第三條 未痘兒等調査ノ爲メ町村衛生委員ハ第一號痘
痘人名簿ヲ備へ該二十五年以下ノ者ヲ記入シ生死移
轉等出入アル毎ニ加除シ天然痘及種痘初種再三種濟ノ
年月日ヲ記入シ置クヘシ

但寄留ノ者ハ別ニ名簿ヲ設クルモ妨ケナシ

第四條 町村衛生委員ハ種痘名簿ニ依リ未痘兒等ヲ取
調其姓名ヲ種痘期日前受持種痘醫ニ報知シ及日限場
所等ヲ種痘兒ノ父兄へモ通知スヘシ

第五條 種痘及點檢ヲナス場所ハ別ニ設クルモ醫食ノ

百六十二

宅ニ於テスルモ町村ノ便宜タルヘシ

第六條 種痘日毎ニ町村衛生委員ハ其場所ニ出張諸事
周旋スヘシ

第七條 種痘兒病氣又ハ不得已事故アリテ出頭シ難キ
モノハ第二号書式ニ準シ届出ルモノトス事故解除ノ
上臨時接種セシムヘシ

但病氣ハ醫師診斷書ヲ要ス

第八條 種痘セシモノハ種痘醫ノ指揮ニヨリ接種後六
日目或ハ七日目ニ必ス點檢ヲ請ヒ第三號種痘濟ノ證
書ヲ受クヘシ若シ病氣又ハ事故アリテ右期日ニ點檢

ヲ請フヲ能ハサルモノハ前條ノ如ク届出ヘシ
 但本條點檢ヲ遂ケサル者ハ種痘證書ヲ附與セス未
 痘兒ト看做スヘシ

第九條 初種不善感ノ者直ニ再種シ難キハ其旨趣ヲ
 記シ第三號證書ヲ與ヘ置キ再種ヲ念ルニ於テハ町村
 衛生委食ヨリ督促スヘシ

第十條 再三種ヲナスモノハ初種ノキ受ケ得シ種痘濟
 證書ヲ醫食ニ出シ醫食ニ於テハ第三號雛形ニ準シ證
 書ノ裏面ヘ筆記スヘシ

第十一條 種痘ニ係ル費用ハ其町村ニ於テ便宜方法ヲ

設クヘシ

第十二條 故意ニ届出ヲ怠ルカ又ハ種々無稽ノ説ヲ唱
 へ種痘普及ヲ妨害スル者等アラハ町村衛生委食ヨリ
 所轄警察署ヘ届出ヘシ
 第壹號 種痘名簿雛形

天然痘		何ノ誰	
年初種	再三種	再三種以上	誕生年月
年 月	年 月	年 月	姓
何年何月何日	何年何月何日	何年何月何日	長男女
善感	不善感	不善感	何ノ誰
何年何月何日	何年何月何日	何年何月何日	何ノ誰

例一ハ明治十四年一月初種セシモノハ再種年期明治十九年一月(即五少年)再種年ニ歸ルノ類

町村番屋敷

				再	三
				再	三
				何	二男女

第貳號 屆書式

御 届

用紙野半紙

私幾男女第妹或入何々

百六十四

何ノ 誰

備何月何年何ヶ月

右何々ノ事故有之ニ付種痘(點檢)難相受候間此段致御
届候也

何國郡町番屋敷

戸主

何ノ 誰

年 月 日

前書之通相違無御座候也

衛生委員

何ノ 誰

區郡 長宛

第三號

寸法用紙適宜

種痘醫
割印

表面

證

縣國區町番屋敷
何某男
名
何月何年何月

左何類右種痘濟

縣國區町番屋敷
種痘醫
姓名印

年月日

衛生委員
名簿卜割印

割印全上

裏面

割印同上

再種濟善感或ハ不善感

縣國區町番屋敷
種痘醫
姓名印

年月日

三種濟善感或ハ不善感

縣國區町番屋敷
種痘醫
姓名印

年月日

割印同上

割印全上

甲第百十九號

明治十四年六月廿二日

本縣醫學校規則別冊之通改正候條此旨布達候事
(別冊)

醫學校規則

夫レ醫學ハ悠遠ニシテ無疆廣大ニシテ精微苛マ此ニ
從事スル者親試目驗終身切瑳勉勵スルニ非ラズンハ
焉ンソ能ク其底蘊ヲ獲ルヲ得ンヤ然レハ目下民間
其人ニ乏シク衛生ノ道未ダ遍カラス是ヲ以テ本校ニ
於テハ專ラ速成普及ヲ旨トシ教授ノ期四春秋ニシテ
醫學ノ要領ヲ脩メシメ尙一層深奥ノ域ニ入ランヲナ

百六十六

欲スル者ニハ更ニ他ノ專門講筵ニ就カシメ以テ之ヲ
教導シ時運ノ進歩ニ隨テ漸次規模ヲ擴張シ以テ醫生
ヲ陶冶シ醫風ヲ改良スルノ本源トナサントス蓋シ本
校創設以來茲ニ九年明治十一年一月肇メテ規則ヲ制
定ス之ヲ第一改定規則トス次テ同年四月改訂ヲ加フ
之ヲ第二改定規則トス今ヤ第三改定規則ヲ編制シ以
テ本校ノ管理ニ便セントス焉

校則

第一條 本校生徒ハ醫學生徒及ヒ傍聽ヲ願フ所ノ卒業
醫士ノ二級トス

第二條 本校生徒ハ入舎或ハ通學セシムル者トス

但シ入舎志願者タリトモ塾舎ノ都合ニ由テ之ヲ許サ、ルヲアリ

第三條 本校ノ入學期ハ毎年八月ト定メ其入學ヲ願フ者ハ年齢満十七歳乃至二十五歳ニテ種痘或ハ天然痘ヲ經タル者ヲ限り學力及ヒ体格檢査ノ上入學ヲ許可ス

但シ年齢二十五歳以上ニシテ入學ヲ請フ者アルハ生徒ノ欠食ヲ計リ之ヲ許可スルヲアルヘシ

第四條 毎期募集スヘキ生徒ハ其數月前ニ之ヲ廣告ス

ル者トス而シテ入學志願者ハ第一号書式ノ願書二通ニ戸長ノ奥印ヲ捺シ之ニ履歷書一通ヲ差出スベシ

第五條 生徒入學試験ニ用ユル書ハ皇漢ノ兩史ニシテ之ヲ素讀且ツ講釋セシメ又作文ヲモ試ムル者トス而シテ若シ高等學ノ科ヨリ脩學セント希望スル者ハ直ニ本校教科目ノ次序ヲ以テ其試験ヲ行ヒ教則中第七條ニ適準スル所ノ及第點數ヲ得ル者ハ乃チ其次級學科ヨリ脩業セシムル者トス

但シ他府縣醫學校ノ卒業證書ヲ所有スル者ハ試験ヲ要セス

第六條 正課時間ハ毎年五月一日ヨリ九月三十日ニ至ルノ間ハ午前七時ヨリ正午第十二時迄トシ十月一日ヨリ四月三十日ニ至ルノ間ハ午前第八時ヨリ正午第十二時及ヒ午後第一時ヨリ同ノ第二時迄トス

但シ時宜ニ依リ之ヲ改易スルヲアルヘシ

第七條 正課時ハ毎時點鐘ヲ以テ之ヲ報ス

但シ點鐘後十分時内ニ教場ニ出ツル者トス

第八條 生徒若シ病氣或ハ事故アリテ登校セザルキハ必ス正課時前共理由ヲ會長局ニ届出會長局ヨリ之ヲ教員ニ報道スル者トス

但シ三日以上欠課ヲ要スルキ疾病ニハ醫士ノ診斷書ヲ添ヘ事故アルキニハ會則第六條ニ準シ出願スヘシ

第九條 生徒脩業上必用ノ書籍ハ之ヲ自辨セシム然レモ其自辨スル能ハサル者ニハ詮議ノ上校本ヲ貸與スルヲアルヘシ

但シ校本拂下ケテ願フ者ニハ詮議ノ上原價ヲ以テ拂下クヘク而シテ若シ其代價ヲ一時ニ完納スル能ハサル者ハ月賦上納ヲ許スヲアルヘシ

第十條 定期試験成績優秀ナル生徒ハ之ヲ褒賞シ其拙

劣ナル生徒ハ之ヲ戒責ス

第十一條 生徒入校ノ時ハ第二號書式ニ準シ證書一通ヲ出サシメ他管下ノ生徒ハ更ニ束脩金壹圓月謝金半圓ヲ納メシム

第十二條 生徒ノ收納金ハ毎月廿五日限り之ヲ舎長局ニ差出スヘシ

第十三條 休課ハ土曜日午後日曜日祝日祭日夏期休業自七月十一日及至八月三十日冬期休業自十二月廿五日及至一月十日トシ其他ハ政府ノ發令ニ從フ者トス

但シ臨時休業ハ當日之ヲ揭示ス

第十四條 禁條

第一項

- 一 教場ニ於テ雜談或ハ喫烟スルヲ
- 一 漫リニ教場及口各局ニ立入ルヲ
- 一 私カニ校内ノ備品ヲ取扱ヒ或ハ之ヲ散亂スルヲ
- 一 校内ニ於テ放歌吟詩搏戰等ヲ爲スヲ
- 一 消燈時限後ニ於テ燈ヲ點シ且ツ爐火ヲ消滅セサスルヲ

一 他人ノ勤學安眠ヲ妨害スルヲ

第二項

- 一許可ナクシテ外來人ヲ校舍内ニ誘引スルヲ
- 一茶菓ノ外許可ナクシテ食物或ハ酒類等ヲ校舍内ニ入ル、ヲ
- 一正課時間理由ナクシテ教場ニ出テザルヲ
- 一校内ノ家屋牆壁樹木等ヲ塗抹シ或ハ毀損スルヲ
- 一校内ニ於テ塀牆或ハ屋上ニ攀リ又ハ瓦石等ヲ擲ツヲ
- 一休憩即外出時間ノ外許可ナクシテ門外ニ出ツルヲ
- 一門限ニ後ル、ヲ

第三項

- 一故意ニシテ校内備品ヲ破損シ其用ヲ失ハシメ若クハ紛失スルヲ

第四項

- 一許可ナクシテ外泊スルヲ
- 一破廉恥ノ所業ヲ爲スヲ
- 一禁條中第一項或ハ第二項ノ目ヲ三犯スルヲ
- 一職責ノ訓戒ヲ聽カサルヲ
- 一怠惰ニシテ卒業ノ目途ヲ失ヒ且ツ放逸ナルヲ

第十五條 罰條

- 一門外散步三日乃至一週間ヲ禁ス

- 禁條第一項ノ目ヲ犯ス者
- 一 門外散歩一週乃至二週間ヲ禁ス
- 禁條第二項ノ目ヲ犯ス者
- 一 物品ノ原價ヲ償ハシメ且ツ門外散歩一週乃至二週間ヲ禁ス
- 不注意ニシテ破毀或ハ紛失スル者ハ原價ヲ償ハシムルニ止ル
- 禁條第三項ノ目ヲ犯ス者
- 一 放校
- 禁條第四項ノ目ヲ犯ス者
- 一 通學生徒犯則スルハ教場淹留一時間ヲ以テ一日ノ禁足ニ換ユル者トス

第一号入學願書式 用紙美濃野紙 入學願

何縣下何國何郡何町何番地居住
若士族平民諸子弟

姓 名

當何月何年何ヶ月

御校ニ入學志願ニ付履歷書相添此段相願候也

願人 姓名 印

族籍住所

証人 姓名 印

醫學校御中

年月日

右之通相違無之候也

戶長 姓名 印

履歷書式 用紙同上

履歷書

姓名

年齡

一 何年何月ヨリ何年何月マテ何所誰ニ從ヒ皇學何々
脩業或ハ何處何學校ニ於テ何等何級何學卒業

一、
一、
一、
一、
一、
一、

右之通相違無之候也

姓名 印

年月日

第二号入校證書式 用紙美濃紙

證書

族籍住所

姓名

右之者今般入學御許可相成候上ハ御校中ノ諸規則恪
守可爲致ハ勿論本人ニ係ル一切之事件私引受可申候
依テ證書差出候也

年月日

族籍住所

證人姓名印

醫學校御中

教則

第一條 本校ノ教育年限ハ四ヶ年ト定メ更ニ之ヲ八期ニ分ツ其教科目左ノ如シ

第一年即第一期及第二期教科

理學

化學附製藥學

解剖學

數學

第二年即第三期及第四期教科

百七十三

生理學

組織學 附顯微鏡技附

外科總論

附一般器械學
一般縫帶學
一般手術學

病理總論 附察病學

第三年即第五期及第六期教科

藥物學 附處方學

外科各論

內科各論

婦人病論

產科學

眼科學

第四年即第七期及第八期教科

外科各論

內科各論

小兒病論

衛生警察學

斷訟醫學

臨床講義

第二條 授業及試験ハ専ラ國語ヲ以テスト雖凡總當ノ
譯字ナキ他國語ハ之ヲ用フルヲアムヘシ

第三條 授業ハ教員ノ任ニシテ其科目分擔ハ校長之ヲ
命スル者トス

第四條 毎週土曜日ニ於テ口述若クハ記載試験ヲ行ヒ
其評點ヲ與フ之ヲ小試験ト名ツク

第五條 小試験ニ出席セサル生徒ハ總テ之ニ零點ヲ與
ヘ期内小試験ノ全成績ニ其點ヲ合算スル者トス
但シ事故アリテ願濟ノ上欠席スル者及ヒ病氣ニ由
テ醫師ノ診斷書ヲ差出シ欠席スル者ニ限り本文ノ

例ニ非ス

第六條 一期ノ授業畢ル毎ニ口述及記載試験ヲ行ヒ其
點數ト該期内小試験ノ點數トヲ合算シテ生徒ノ階級
ヲ定ム之ヲ定期試験ト名ツク

但シ該試験ハ毎歲夏期七月一日ヨリ同十日ニ至リ
冬期十二月十五日ヨリ同廿五日ニ至ルノ間ニ於テ
行フ者ニシテ其問題ハ分擔教員之ヲ與ヘ且ツ校長
之ニ臨席スル者トス

第七條 試験ヲ行フ後其成績ノ優劣ヲ鑑別シ而メ其評
點數ニ從テ生徒ノ等級ヲ定ム

優等 評點十

上等 評點八

中等 評點六

並等 評點四

劣等 評點二

但し並等以上ヲ及第點ト爲シ其以下ヲ落第點ト爲ス

第八條 各學科定期試験評點ハ之ヲ合シ其科數ヲ以テ之ヲ除シ其商ヲ以テ全成績點ト爲シ此商ヲ八分ト爲シ該期小試験全成績點ヲ二分ト爲シ之ヲ合算シテ以テ其期成績ノ全評點ト爲シ之ニ從テ生徒ノ階級ヲ定ムル者トス

第九條 同學科ヲ脩ムル者同數ノ全評點ヲ得ルヲ二名

百七十五

以上ニ至ルキハ平素ノ品行方正且ツ勉勵ナル者ヲ以テ上級トナス又一年中第二ノ定期試験ニ於テ全評點四個ニ至ラサル者ハ原級ニ留メテ其科ヲ再修セシメ次年ノ第二定期試験ニ於ケルモ亦同數ノ全評點ヲ得ル者ハ之ヲ退校セシム

第十條 受験ノ生徒ハ筆墨ノ外試験場ニ携帶スルヲ許サス又試験應答ノ畢ラサルニ場外ニ出テ或ハ互ニ談話シ或ハ交モ其記載答書ヲ見ルヲ禁ス

第十一條 全期ノ學科ヲ畢シ後更ニ大試験ヲ行ヒ其及第スル生徒ニハ醫學卒業ノ証狀ヲ與フ之ヲ卒業試験

ト名ツ

第十二條 卒業試験ニハ縣官校長ノ列席ニ於テ卒業試験委員各學科六條ノ問題ヲ各生徒ニ與フ但シ三條ハ記載問題ニシテ他ノ三條ハ口述問題トス

第十三條 卒業試験科目及卒業証狀雛形左ノ如シ

- | | | |
|------|------|-------|
| 理學 | 化學 | 解剖學 |
| 組織學 | 生理學 | 外科總論 |
| 病理總論 | 藥物學 | 内科各論 |
| 外科各論 | 眼科學 | 婦人病論 |
| 產科學 | 小兒病論 | 衛生警察學 |

百七十六

剛訟醫學

卒業証狀 雛形

生徒姓名

右醫學卒業候事

各學科名稱 試験點數

試験委員印

教師印

校長印

年月日

第十四條 記載試験答記ノ時間ハ定期試験ニ於テハ一時間二問題卒業試験ニ於テハ一時間一問題ヲ答記ス

九者トス

第十五條 卒業生徒ニシテ更ニ各學科ヲ脩メンヲ志願シ或ハ開業醫士ニシテ各學科ノ講義ヲ聽カンヲ志願スル者アルハ共ニ之ヲ認可スル者トス

舍則

第一條 舍則ハ各生徒ニ一通宛與ヘ之ヲ嚴ニ遵守セシムル者トス

第二條 入舍生徒ノ日課時間及外出時間ハ左ノ如シ

日課時間		自五月一日至九月三十日		自十月一日至四月三十日	
晨起	前	六時	前	七時	
朝餐	自前	六時半	自前	七時半	
受業	自前	七時	自前	八時	
午餐	自正午	十二時	自正午	十二時	
自脩	自后	二時半	自后	一時半	
受業	自后	二時	自后	一時	
休憩	自后	六時	自后	四時	
夕餐	自后	六時半	自后	四時半	
休憩	自后	九時	自后	五時	
自脩	自后	九時半	自后	五時半	
自脩	自后	十一時	自后	八時	

就眠	后 十一時	后 十時
外出時間		
平日	自后 八時 至同 二時	自后 六時 至同 二時
土曜日	自后 九時 至正午 十二時	自后 七時 至正午 十二時
日曜日 祝祭日	自前 六時 至后 九時	自前 七時 至后 七時

第三條 正課時ハ每一時點鐘ヲ以テ其始終ヲ報スル者トス

第四條 生徒外出ニハ必ス門鑑ヲ門番ニ附シ置キ歸校ノ時再ヒ之ヲ領取シ直チニ自ラ舎長局ニ返還スル者

トス決シテ他人ニ托スルヲ許サス

第五條 生徒外出中卒然疾病ヲ發スルカ若クハ他ニ事故ヲ生シ鎖門時限ニ歸校シ能ハサリシキ必ス其手續書ヲ舎長局ニ出スヘシ

但シ疾病ニ罹ルキハ最寄開業醫士ノ診斷書ヲ添ヘ事故有ルキハ証人或ハ親族ノ連署ヲ以テスル者トス

第六條 生徒事故アリ歸郷或ハ外泊等ノ爲メ數日間日課ヲ欠ク者或ハ遅刻或ハ外出ヲ欲スル者等ハ左ノ手續ニ據テ出願スヘシ

第一項 父母及ヒ妻子疾病ニ罹リ看護ノ爲メ歸郷ヲ出願スル者ハ其受診醫ノ診斷書ヲ添ヘ証人若クハ親戚ヨリ出願スヘシ

第二項 止ムヲ得サル事故アリテ歸郷ヲ出願スル者ハ詳細其情實ヲ記載シ証人或ハ親戚連署ヲ以テ出願スヘシ

第三項 事故アリテ外泊ヲ要スル者ハ其事實ヲ詳記シ証人或ハ親族連署シ其要求人ヨリ出願スヘシ
但シ日課ヲ欠ク者ノ如キハ第一項ニ準シテ出願スヘシ

第四項 遅刻或ハ外出ヲ要スル事故アル者ハ詳細其事實ヲ記シ証人或ハ親戚ノ連署ヲ以テ出願スヘシ
但シ遅刻ハ午後第十一時ヲ限リトス若シ此時限ニ後クモ、キハ第五條ニ準スル者トス

第七條 生徒發病ニ由テ正課時間教場ニ出ツルヲ能ハサル者ハ其時限前ニ之ヲ舎長局ニ届出ツヘシ

第八條 就眠後ニハ燈火及ヒ爐火ヲ消滅スヘシ

第九條 喫飯時限ニ後モ、可カラズ
但シ疾病ノ爲ニ食堂ニ登ルヲ能ハサル者ハ此限ニアラス

第十條 生徒一ヶ月ノ食費ハ大概三圓五拾錢トス

但シ物價ノ高低ニ由リ之ヲ増減スルヲアルヘシ

甲第百三十四號 明治十四年七月一日

傳染六病及麻疹患者届出方之儀ハ明治十三年第三十四號公布并本年當縣甲第四十五號ヲ以テ及布達置候處尙ホ死亡治癒トモ其都度速ニ可届出此旨布達候事

甲第百三十五號 明治十四年七月一日

本年^三當縣甲第四十六號布達種痘心得書中第十條へ左之通但書追加候條此旨布達候事

第十條 云々

但種痘證書ヲ紛失セシ者ハ種痘醫ニ就キ接種ノ濟否鑒定ヲ請ヒ果シテ種痘済タレテ明確ナル者ハ更ニ該證書ヲ受授シ其明確ナラサレモノハ未痘兒ト見做シ取扱フヘシ

甲第百四十五號 明治十四年七月十二日

賣藥營業及請賣行商免許期限後引續營業セント欲ル者ハ滿期二十日已前必ス願出ヘシ仮令一日タリル滿期後等閑ニ差置キ營業候者ハ賣藥規則ニ照シ處分候條心得違無之様可致此旨布達候事

甲第百九十二號 明治十四年十月十日

石炭酸其他劇藥ハ藥品取扱規則ニ照シ可取扱ノ處明治十三年第二十三號公布ノ趣モ有之目下傳染病流行ノ兆アルニ付消毒藥ニ調製候分ニ限リ更ニ藥舖ニ於テ販賣差許候條販賣志願ノ者ハ藥名分量用法等詳記シ出願可致此旨布達候事

但販賣差止ノ候節ハ其都度可及布達候條此旨心得ヘシ

乙第廿八號

明治十四年二月廿六日

本年當縣甲第四十二號ヲ以獸病診察醫人名布達候ニ付爾後該醫死亡等ニテ變換ノ節ハ更ニ適宜ノ者撰舉申出

百八十一

辭令授受ノ上ハ其人各部内エ告示可致此旨相達候事

乙第六十號

明治十四年四月廿八日

郡區役所

町村衛生委員

明治十三年當縣乙第百四十一號ヲ以相達候第一號月報表ノ中種痘人食ハ自今月報ニ及ハス別表雜形ニ因リ毎半年ノ食數取調第二號表一同一月七月十日限郡區役所ヘ可差出此旨相達候事

第二號每半年表追加

種痘人食			種		種痘醫									
			初	種	再三種	合計								
合計	不善感	善感	一年以下	二年以下	四年以下	四年以上	小計	再三種	合計	十五年以下人員	種痘濟	天然痘濟	未痘	種痘醫
			初	種	種痘濟	天然痘濟	未痘							

解釋 明治十三年當縣乙第百八十六号達第一号表解釋ノ中種痘人員ノ調査ニ係ルニハ左

○半年内若シ一人モ種痘セサルハ種痘人食ノ欄ニ及種痘醫ナキ
 町村ハ種痘醫ノ欄ニ一印ヲ記スヘシ○十五年以下人食及次欄内
 譯ノ數ハ都テ半年末日ノ現在數ヲ掲メ

乙第六十六號

明治十四年六月四日

郡區役所

町村衛生委員

明治十三年太政官第三十四號ヲ以傳染病豫防規則公布
相成候處豫防手續ノ如キハ土地人情ニ因リ畫一ノ方法
モ難相設候ニ付別冊心得書ニ準シ豫防行届候様取計フ
ヘシ此旨相達候事

(別冊)

傳染病豫防法心得書

凡ソ傳染病ハ其種類多シト雖モ流行性傳染病ノ一旦萌

百八十三

動シテ其蔓延ノ熾ナルニ至テハ救療ノ法モ治ク及ヒ難
ク終ニ其猖獗ヲ縱ニシ慘酷ヲ極ムルニ至ル然ルニ豫防
法アリテ之ヲ守ル嚴ナルルハ其病害ヲ未熾ニ防遏スヘ
シ加之消毒法アリテ之ヲ行フ密ナルルハ各種ノ病毒ヲ
消滅スルヲ得ヘシ消毒法ハ即チ豫防法ノ一種ニシテ殊ニ
其効驗確實ナルモノナリ目今本邦流行傳染病中最モ豫
防注意ヲ要スヘキハ虎列刺、腸窒扶私、赤痢、實布埜利亞、
發疹窒扶私、痘瘡ノ六病トス而テ各種ノ病症ニ從ヒ豫防
ノ法モ亦其趣ヲ異ニスト雖モ其要領ハ之ヲ約スルニ四
項ニ出ス其一ハ病毒ノ萌動及ヒ蔓延ノ因ヲ除却スルニ

アリ即チ清潔法 其二ハ各人體中有スル所ノ感受性ナカラシム
ルニアリ即チ衛生法 其三ハ病毒傳播ノ媒介ヲ隔離スルニアリ
即チ隔離法 其四ハ傳染病毒ヲ消滅スルニアリ即チ消毒法 右ノ四項ニ
依リ豫防ノ事ヲ施サ、ルヘカラス故ニ其大意ヲ示ス
左ノ如シ

清潔法大意

流行性傳染病毒ノ眞性ハ確知シ難シト雖モ病理家ノ論
斷ニ據ルニ必ズ微ノ有機物アリテ外方ヨリ人體ニ竄入シ
以テ其病ヲ發スルモノアルカ如シ蓋シ此毒物ハ多ク地
中及ヒ水中ニ在テ萌動シ尋テ氣中ニ混シ然レ後人體ニ

入ルヲ得ルモノトス故ニ其病ニ罹ル者ノ排泄物地中若
クハ水中ニ滲入スルハ即チ其毒ヲ散漫シ其地方ニ於
テ衆人一齊ニ同一ノ病ヲ發スルヲ理ニ於テ疑フヘカラ
サルナリ

此有機性病毒ハ地中或ハ水中氣中ニ生殖ヲナスニ必ズ
多少ノ助養物ナカレヘカラス而メ其助養物タルハ凡百
ノ有機物體ノ腐敗ニ向ハントスル者之カ發生ヲ助ル者
ニ似タリ夫ノ魚市屠場等不潔ノ地及ヒ糞屎塵芥ノ堆積
セル地ノ如キハ其腐敗物地中及ヒ水中ニ滲透シ又此ヨ
リ蒸發スルモノ大氣中ニ混入スルヲ以テ病毒ノ助養物

甚タ多クシテ忽チ蕃殖ノ速ナルヲ致ス故ニ土地ノ不潔
ハ傳染病ヲ蔓延セシムルノ媒介タリ是ヲ以テ其病發生
スルキハ必ス家屋ヲ清潔ニシ溝渠、芥溜、廁圍等ノ汚物
ヲ掃除セサルヘカラス是清潔法ヲ要スル所以ナリ

攝生法大意

凡ソ人強健ナルキハ病毒ノ侵襲ヲ拒クヘキノ機能ヲ有
スト雖モ過度ニ勞動シ及ヒ飲食ノ不良或ハ不足等ヲ以
テ身体之カ爲メニ衰弱スルキハ病毒ノ侵襲ヲ受クル
最モ甚シトス彼ノ發疹瘡疥ノ飢饉軍役ノ際ニ乘シ其
猖獗ヲ逞フシ又平生飲食不節或ハ不良ニシテ腸胃之カ

爲メニ些少ノ損害アルキハ虎列刺ノ侵襲ヲ受ルカ如キ
等ヲ以テ証スヘシ其餘精神非常ノ感動及ヒ感冒等モ亦
能ク病毒ヲ招クノ媒介トナシモノナリ故ニ流行ノ際ニ
當テハ殊ニ攝生ノ法ヲ嚴守シ病毒侵入ノ地ナカラシム
ルヲ專要トス若シ人々普ク此豫防法ノ要訣ヲ守リ得ル
ニ至ラハ全ク傳染病ヲシテ流行蔓延ノ甚シキニ至ラシ
メサルヘシ是攝生法ヲ要スル所以ナリ

隔離法大意

傳染病毒ハ管ニ地中若クハ水中ニ舍リテ傳播スルノミ
ナラス患者ノ排泄物呼吸蒸發氣等ヨリ直ニ感染スル

アリ故ニ病體死體共排泄物等ハ速ニ之ヲ隔離シテ觸接ノ憂ナカラシムヘシ隔離法トハ患者ヲ別室ニ移シ門戸ニ病名票ヲ貼附シテ外人ニ表示シ或ハ之ヲ避病院ニ送致シ要用アル人ノ外務メテ交通ヲ絶ツ等ノ事是レナリ殊ニ其恐ムヘキ傳染病ニ於テハ患者ニ接近シタル看護人等モ亦他ノ健康人ト隔離セサルヲ得ス苟モ能ク其法ヲ守リ病毒ニ遠サカユヲ得ハ必ス傳染ノ蔓延ヲ致サ、ムベシ是隔離法ヲ要スル所以ナリ

消毒法大意

凡ソ傳染病毒ハ其性分極メテ微小ニシテ見ルヘカラス

ト雖モ傳送物中ニ混入シテ人體ニ達シ其病症ヲ發現スルモノトス此傳送物ヲ滅スルハ即チ病毒モ亦消盡ス故ニ烈火ヲ用ヒ之ヲ燒盡スルハ消毒ノ最良トス然レ尙其燒棄ニ付シ難キモノハ或ハ藥劑ヲ用ヒテ薰蒸若クハ灌注シ或ハ之ヲ洗滌シ以テ其病毒傳染ノ力ヲ撲滅スルヲ得ヘシ然ラザレハ其病毒散蔓シテ終ニ消滅スルヲナカラン故ニ病毒萌動ノ後ニアリテハ消毒ヲ以テ豫防法中ノ最モ緊要ナルモノトス消毒法ヲ施スニ當テ其病性ト其施スヘキ物トニヨリ其科ヲ同クセス故ニ之ヲ分チ第一患者及ヒ看護人等消毒

法、第二死體及ヒ排泄物等消毒法、第三衣服卧具等消毒法、第四家屋船舶等消毒法、第五什具運搬器等消毒法、第六廁園溝渠等消毒法トス但實布埤利亞、發疹室扶私、痘瘡ノ三病ハ第六ノ消毒法ヲ行フノ限ニアラス
凡ソ病毒ノ最モ含藏シ易キモノ即チ毛布、綿布、綿絮、疊、蓆、敷物ノ如キ氣孔鬆疎ナルモノト居室及ヒ室内ノ諸器具ノ如キハ其病毒浸染ノ深淺ニヨリ消毒法ヲ行フヘキモノトス
右ニ載タル薰蒸及ヒ洗滌ノ外其燒却ヲ憚ル品物ニシテ浸染セル病毒ノ萌生機能ヲ消滅セシメント欲スルルハ

燒氣消毒竈ナルモノヲ用テ華氏二百二十度ヨリ二百五十度ニ至ルノ燒氣ヲ治ク四方ヨリ通セシメ以テ之ヲ滅滅スル法アリ然レハ其構造宏大ニシテ各地ニ設テ難キヲ以テ茲ニ詳記セス且ツ大氣日光ノ如キモ自然消毒ノ功アル者ニシテ善ノ微隙ニ達スト雖モ但々其力藥品ニ比スレハ甚々弱キヲ以テ多少時日ヲ經サレハ其効ヲ奏シ難シトス

消毒藥劑ハ其品類頗ル多ク且ツ其性質功能モ亦同一ナラス故ニ其功能ヲ類別シテ第一號ヨリ第十二號ニ至ルヲ以テ各病消毒法ノ條ト相照シテ之ヲ用フルニ便ニス

其功用ノ如キハ化學作用ニ涉ルヲ以テ之ヲ略ス

○消毒藥

(第一) 濃厚石炭酸水

結晶石炭酸四分ヲ百分ノ水ニ溶シタルモノ

但石炭酸一分ニ虞利斯林又ハ亞爾魯保兒二分ヲ和シテ能ク溶解シ後ヲ本量ノ水ヲ加フヘシ

(第二) 稀薄石炭酸水

結晶石炭酸二分ヲ百分ノ水ニ溶シタルモノ

但溶解法前ニ同シ

(第三) 石炭酸蒸氣

結晶石炭酸或ハ之ニ二倍ノ亞的兒ヲ加ヘタルモノヲ皿ニ入レ微火ニ上セ蒸發

セシメ或ハ石炭酸一分ニ餾水二十分ヲ和シ布片ニ懸シ室内ニ懸ケ置キ蒸發セシムヘシ

(第四) 石炭酸末

粗製石炭酸ヲ以テ砂、灰、木炭末、鋸屑等ヲ混濁セシメタルモノ

但粗製石炭酸ハ四十分ヨリ六十分ノ「フェニール」酸即チ結晶石炭酸ヲ含ミ稍々色ヲ帶ヒタル流動石炭酸ナリ

以下消毒同功アルモノニシテ通常用ヒサル品

サリシスル酸三百倍ノ水ニ溶解ス

テール油

石炭酸石灰 石灰百分石炭酸三分

(第五) 硫酸鐵合劑

綠礬三百枚ヲ常水一斗ニ和シ粗製石炭酸百枚ヲ加ヘ
タルモノ

但此合劑ハ久ク貯フベカラス用ニ臨ミテ調製スヘ
シ

(第六) 硫酸硫酸鐵合劑

硫酸五分硫酸鐵六分水八十九分ヲ和シタルモノ
以下消毒同功アルモノニモ通常用ヒサル品

百八十九

鹽化亞鉛 八倍ノ水ニ溶解セルモノ

明礬

粗製明礬ノ過量ヲ水中ニ投シ能ク攪拌シテ後其
上清ヲ取ル

ゴロール 明礬 四倍ノ水ニ溶解ス

皓礬 百二十倍ノ水ニ溶解ス

(第七) 木炭 木炭二分生石灰二十分

(第八) 石灰

其他木炭、薪屑、土等ハ又多少收結ノ功アルモノトス

(第九) 亞硫酸瓦斯

硫黄ヲ燒テ瓦斯ヲ發生セシム其法八疊敷ノ室ニ硫黄
大約三百匁ヲ(木炭末大約十匁ヲ加フルキハ更ニ宜シ)
ヲ要ス但一時ニ火焰ノ昇騰スル恐アルヲ以テ二三ノ
火鉢ニ分配シ熾炭ヲ之ニ點シテ徐々ニ焚燒セシムベ
シ

但多數ノ物品ヲ消毒スルニハ密閉シタル室土器ニ
索ヲ張リ消毒スヘキ衣服等ヲ掛ケ或ハ竹架ヲ設ケ
テ之ヲ排列シ本量ノ硫黄ヲ薰スヘシ又人々各自ノ
衣服等ヲ消毒スルニハ一握ノ粗製硫黄ヲ火鉢ニ入
レ火ヲ點シ伏籠ノ類ヲ覆ヒ之ニ衣服ヲ被ラセ薰蒸

スヘシ

(第十) 亞硫酸溶液

(甲) 強百分ノ十ヲ含ムモノ

(乙) 弱百分ノ五ヲ含ムモノ

但製法ハ略ス

(第十一) 過滿倦酸加里溶液 百倍ノ水ニ溶解ス

(第十二) コローニ瓦斯

十分ノ食鹽ヲ五分ノ礬石末ニ密和シテ磁皿上ニ置キ
十分ノ硫酸ヲ十分ノ水ニ混和シタルモノヲ注キテ之
ヲ發生セシム

以下消毒同功アルモノニメ通常用ヒサル品

亞硝酸瓦斯

磁皿ニ銅屑ヲ盛リ置キ硝酸ニ少許ノ水ヲ加ヘテ稀釋シ徐々ニ之ヲ注キテ瓦斯ヲ發生セシム

コロール石灰溶液

コロール石灰一分ヲ水百分ニ溶解ス

硝酸

磁皿ニ盛リ微火ニ上セ蒸發セシム

○ 以下六病各四項ノ區別ニ因リ豫防法實施ノ事ヲ類別

開示ス而テ其手續ハ各項自カラ連帶シテ唇齒相保ツモノトス故ニ一事ニシテ其項ヲ同クセサルモノアリ例ヘハ虎列刺病ヲ豫防スルニ先ツ廁圍ノ掃除ヲ要スルハ清潔法ニ屬シ其患者ヲ尋常ノ廁ニ上ラシメス吐瀉物ヲ遠隔ノ地ニ搬運セシムルハ隔離法ニ屬シ其之ヲ運搬セシムル前ニ消毒ヲ行フハ消毒法ニ屬シ其事ハ一途ニシテ前半ハ隔離法中ニ載セ後半ハ消毒法中ニ載スルカ如シ此心得書ニヨリ實施スル者宜ク相對照シテ其順序ヲ誤ルコト勿レ

虎列刺

虎列刺ハ特異ノ流行性傳染病ニシテ其病毒ハ病者ノ吐瀉物中ニアリ然シテ其吐瀉物ノ泡醗ニ向ハシトスル時最モ傳播ノ媒介ヲナス丁甚シトス故ニ此病毒一回不潔汚穢ノ地中水中ニ入ルキハ更ニ其蕃殖ノ力ヲ加ヘ動モスレハ飲料水ニ混シ遂ニ人體中ニ入りテ發生ス其症タニ暴カニ吐瀉シ生力忽チ沈衰シテ而シテ斃ル傳染病中最モ急劇ナルモノト謂フヘシ印度地方ニ於テハ毎歲發動シテ地方病トナルト雖モ人民ノ交通ニヨリ四方ニ蔓延シ到ル所或ハ三四年間流行シ或ハ全ク其痕跡ヲ絶タスシテ散發スルヲアリ總テ此病毒ハ夏月温熱ノ候ニ當

リ其發動ヲ見ルモノトズ眞症及ヒ類似症ノ二種アリト雖モ俱ニ傳染スルモノナリ故ニ其豫防ニ至テハ同様ノ注意ヲ要スベシ

第一項 清潔法

第一條 虎列刺病ノ吐瀉物ハ一滴ダモ汚穢ノ地ニ滲入セシムヘカラス若シ滲入スルキハ其泡醗力ヲ助ケ忽チ蕃滋増殖スルモノナリ故ニ土地ヲシテ不潔ナラシムヘキ芥溜、下水、廁圍、魚市、屠場等ハ常ニ之ヲ掃除スヘシ其掃除スル毎ニ防臭藥即チコロール石灰、明礬強溶液、テール油等ヲ適宜ニ撒注スルヲ良トス

第二條 虎列刺病毒ハ容易ニ水土ニ滲入シテ傳播スルカ故ニ常ニ飲料水ニ注意ヲ加ヘ井戸側及ヒ敷石若クハ敷板ヲ堅牢緻密ニシテ傍地水流ノ滲透ヲ防ノヘシ其他飲料ニ供スル河水及ヒ水道ノ源ハ汚穢物ノ流入ヲ防メヘシ

第三條 虎列刺ノ病毒ハ排泄物ニヨリ傳播スルヲ以テ糞壺若クハ桶ヲ堅牢ニスヘシ且ツ常ニ注意シ糞屎ヲ汲取リテ之ヲ充滿セシムヘカラス殊ニ衆人群集スル所ノ廁圍又井水若クハ水道近傍ノ廁圍ノ如キハ最モ注意ヲ加フヘシ

第四條 糞壺若クハ桶等ニ罅隙アルハ糞汁之ヨリ滲漏シテ忽チ病毒ヲ地中ニ滲透セシム此ノ如キモノハ消毒藥ヲ施スモ其功ヲ奏スル能ハス故ニ罅メ壺桶ヲ點檢シ罅隙アルモノハ之ヲ改良スヘシ

第五條 芥溜ハ雨水滲入スルニヨリ其汚穢ヲ廣ク地中ニ浸漫セシムルヲ以テ木箱或ハ鐵葉箱等ヲ以テ其貯器トナシ板蓋等ヲ設ケ雨水ヲ禦キ且ツ塵芥ヲ堆積セシムヘカラス

第六條 下水溝渠ハ石若クハ堅質ノ木材ヲ用テ有底ノ放水樋ヲ設ケ遠隔ノ地ニ流注セシメ汚水ノ地底ニ滲

入スルヲ防クヘシ其樋上ハ蓋ヲ以テ密閉スベシ若シ
其接合密ナラサレハ却テ其間ニ腐敗氣ヲ停蓄スルカ
故ニ此ノ如キモノハ寧ロ上面ヲ開放シテ大氣ニ曝ス
ヲ以テ愈レリトス

但塵芥ハ必ス溝渠ニ投棄セシムヘカラス

第七條 溝渠ハ注意シテ塵芥ヲ除キ淤泥ヲ浚フベシ且
ツ其泥芥ハ溝側ニ留置カスシテ人家遠隔ノ地ニ搬送
スヘシ然レ炎熱ノ候ニ當テ日中ニ泥芥ヲ攪動スレハ
惡臭ヲ發シテ空氣ヲ汚濁スルノ恐アルニヨリ必ス他
ノ時候ニ於テ之ヲ浚除スヘシ

第八條 魚市屠場ニ於テハ其流出スル所ノ汚水地中ニ
滲入スルノ恐アルヲ以テ第六條ニ同シキ放水樋ヲ設
ケ流注セシムヘシ且屠屑、腥汁ヲ培料ニ供スルカ爲メ
ニ久ノ貯積スヘカラス必ス有蓋ノ箱若クハ桶ニ入レ
置キ速ニ人家遠隔ノ地ニ搬送スベシ其他牛馬ノ廐舎
及ヒ羊豚、鷄鶩ノ畜場等モ亦此旨意ヲ以テ掃除スベシ
第九條 人家稠密ノ場所ニ於テハ培料ノ置場ヲ設ケヘ
カラス若シ止ムヲ得スシテ設ケルハ久シク堆積セシ
ムヘカラス前條ノ旨意ヲ以テ人家遠隔ノ地ニ搬送ス
ヘシ其汚汁滲入スルモノハ更ニ新土ヲ以テ之ヲ覆カ

へし

但村落廣潤ノ地ニ於テハ必スシモ之ヲ要セス

第十條 學校、囚獄、製造所、旅店、劇場等ハ流行ノ際更ニ清潔法ニ注意シ又避病院ニハ掃除専務ノ人夫ヲ設ケ殊ニ注意ヲ加フヘシ

第二項 攝生法

第十一條 虎列刺病ハ各人皆之ニ感スルノ素因アルニ似タリト雖モ就中不攝生ノ人之ニ感スル最多シトス故ニ流行ノ際ハ殊ニ飲食ヲ慎ミ其他不攝生ノ事ヲ戒ムルヲ以テ至要トス

第十二條 飲料水ハ必ス無色無味無臭ノモノヲ撰ヒテ之ヲ用フヘシ若シ止ムヲ得ス其稍々不良ノ疑アルモノヲ用フルルハ之ヲ濾過スヘシ然レル者煮沸ノ後之ヲ用フルノ最量ナルニ如カス蓋シ病毒ハ尠微ニシテ濾過力ヲ以テ盡ク之ヲ附キ去ルヘカラスト雖ル之ヲ煮沸スルルハ其毒分ヲ全ノ殲滅スルノ効アリトス

第十三條 氷及ヒ冷水ハ縱令其質不良ナラサレモ之ヲ過度ニ飲用スルルハ之カ爲ニ下利ヲ發スルモノナリ故ニ流行ノ際ハ過量ノ飲用ヲ戒ムヘシ但不良ナリト認ムルモノハ決シテ之ヲ用フヘカラス

第十四條 酒ノ清醇ナルモノハ之ヲ適度ニ用フレハ害ナシト雖モ暴飲或ハ酸敗セルモノヲ用フレハ腸胃ヲ害シ或ハ下利ヲ發スルモノナレハ流行ノ際ハ必ス其品種ヲ撰ヒ務テ飲量ヲ節減スルヲ良トス

第十五條 食物ハ新鮮ノ肉類消化シ易キ蔬菜ヲ用ヒ平生ノ慣用ヲ改メサルヲ良トス但良好ノ食物ト雖モ之ヲ過食スレハ亦腸胃ヲ害シ此病ニ感シ易キ故ニ流行ノ際ハ務テ適度ニ食シ不消化物ヲ避ケ殊ニ不熟ノ果實ヲ食フヘカラス

第十六條 雨濕或ハ夜氣ニ胃觸シ或ハ過度勞役等皆此

病ニ感シ易キヲ以テ流行ノ際ニハ殊ニ之ヲ慎ムヘシ第十七條 流行ノ際ニ營ヲハ感胃下利ヲ豫防センカ爲メ紋羽木綿等ニテ小腹ヲ巻キ務テ適度ノ温暖ニ其身ヲ保持スルヲ良トス

第十八條 流行ノ際能ク此攝生法ヲ守リ腸胃健全ナルハ些少ノ病毒ヲ受ルモ猶ホ其病害ヲ免ル、フナシトセス看護人及ヒ汚穢物死體等ニ直接スルモノ、如キハ尤モ之ニ注意セサルヘカラス

第十九條 凡ソ豫防ハ平日衛生ノ謹嚴ナルヲ至要トス世間往々豫防藥ト稱スル方劑アリト雖モ多クハ無稽

ノ考案ニ出テ之ヲ服用スルモ功ナキモノ多シトス

第三項 隔離法

第二十條 虎列刺病ハ患者ニ直接スルモ必スシモ感染スルノ理ナシト雖モ其吐瀉物ニ汚レタル患者ニ接シ又ハ其汚染セル物品等ニ觸ル、キハ其媒介ニ因リ病毒ヲ傳フ故ニ患者ト健者トヲ隔離スルヲ以テ豫防ノ要法トス

第二十一條 虎列刺病ハ眞症ト類似トナ論セス醫師診斷シタルキハ直チニ其家ノ門戸ニ病名票ヲ貼附スヘシ

但患者治愈又ハ死亡若クハ避病院ニ送致シ其病室ニ消毒法ヲ行ヒタル後ハ即チ其病名票ヲ去ルベシ

第二十二條 患者ノ吐瀉物ハ之ヲ金屬製或ハ陶製ノ漱盤便器等ニ承ケ木製ノ器ハ其毒滲浸ノ恐アリトス毎回消毒法ヲ施シ壺或ハ桶ニ入レ戶外ニ置キ之ニ密蓋ヲナシ運搬夫ニ付シ人家遠隔ノ地ニ搬送セシメ溝渠、芥溜、田圃等ニ投棄スベカラス且ツ患者ノ入りタル廁園ハ決シテ他人ナシヲ入ラシムヘカラス又初發嘔吐セシ地面等ノ處置ハ第八十一條消毒法ニ依ルベシ

但吐瀉物ヲ運搬スルキ日中ハ虎列刺吐瀉物ト表記

アル號旗ヲ夜中ハ之ニ換ルニ提燈ヲ以テスヘシ
第二十三條 患者ハ其室ヲ異ニシ看護人ノ外ハ成ダケ
接近スヘカラス又止ムヲ得サル事故アルノ外他人ト
交通ヲ絶ツヘシ

但家人ニ要用アリテ來訪スル人アルキハ成ダケ戸
外ニ於テ之ト應接シ屋内ニ入ラシムヘカラス此時
ニ於テハ家人及ヒ來訪人ニ消毒法ヲ行フヲ要セス
第二十四條 家族中ニ於テモ看護人ヲ定メ其他要用ア
ル者ノ外老幼ハ成ダケ早ク他家ニ避退セシムヘシ
但看護人ハ成ダケ其人ヲ更換セサルヲ長トス

第二十五條 病室内ニハ不用ノ器具ヲ置クヘカラス

第二十六條 患者若シ死亡スルキハ成ダケ其屍傍ニ接
近シ又ハ死體ニ沐浴セシムル等ノヲセサルヲ長ト
ス

第二十七條 患者治癒若クハ死亡シ病室ニ消毒法ヲ行
ヒシ後ハ家人其室内ニ起卧スルモ妨ケナシト雖モ若
シ之ヲ用ヒサルモ日用ニ差支ナキ家ニ於テハ數日間
空室ノマ、窓戶ヲ開放シ大氣ヲ流通セシムヘシ

第二十八條 西洋形船舶航海中ニテ發病者アルキハ其
室ヲ異ニスヘシ或ハ之ヲ艦ノ方ニ移スモ可ナリ其看

護人ノ外交通ヲ絶ツテ猶人家ニ於テカ如クスヘシ
第二十九條 船舶内ノ病室ニハ看護人ヲ定メテ吐瀉物
ヲ承ケルテ第二十二條ノ如クシ航海中ハ毎回海中ニ
投棄スヘシ尤モ港灣河湖等ニ於テハ之ヲ投棄スヘカ
ラス必ス最寄ノ地方ニ著シ共地警察官吏或ハ衛生委
員ノ指圖ヲ受クヘシ

第三十條 船舶ヨリ患者若クハ死者ノ届ケアルキハ警
察官吏衛生委員ニ於テ検査ノ上患者ハ之ヲ隔離シ死
者及ヒ汚穢物ハ消毒法ヲ行ヒ第五十四條ヨリ第五十
八條マテニ依リ處置スヘシ

第三十一條 製造所、會社、學校、旅店等ニ在テ發病シ引
取人ナキ者並ニ狹隘不潔ノ地ニ雜居スル者等ニシテ
看護消毒法行届カス病毒ノ傳播ヲ防キ難キキハ之ヲ
避病院ニ送ルヘシ若シ避病院アラサルキハ適當ノ空
屋ニ移シテ之ヲ隔離スヘシ

第三十二條 避病院ノ位置ハ人家ニ接近セス且ツ運搬
ニ便ナル地ヲ撰フヘシ然レモ井泉河流ノ近傍或ハ往
來多キ路傍等ニ設クヘカラス又監獄、墓地、火葬場等ノ
跡ハ用ヒサルナ良トス

第三十三條 避病院ヲ新ニ構造スルキハ空氣ノ流通ヲ

主トシ善美ヲ要セス其牀ヲ高クシ窓戸ヲ濶大ニシ且ツ板壁ヲ用ヒテ洗淨ニ便ニスヘシ但板葺苔葺等ハ其一時ノ便ニ任シテ可ナリ

第三十四條 避病院ノ廣狹ハ大約人口千人ニ患者一人ノ割合ヲ以テシ例ヘハ人口六千人ノ町村ナレハ患者六人分ニシテ每人二坪ト見積リ十二坪ノ病室ヲ要スルノ類ナリ尤モ流行ノ勢ニ因リテハ建坪ヲ増加スルヲ得ルノ餘地ヲ豫メ計畫シ置クヘシ

第三十五條 避病院ノ病室ハ重症輕症及ヒ快復期ノ患者ヲ區別シテ之ヲ分隔シ二坪ニ患者一人ヲ置クヲ常

二百

トシ縱令ロ患者輻湊ストモ一坪ニ一人ノ割合ヨリ狹クスヘカラス

但此他醫師詰所、事務所、看護人休息所、等便宜ニ之ヲ設クヘシ

第三十六條 避病院ニハ簡易ノ薰蒸室ヲ設クヘシ其構造ハ凡ソ一二坪許ノ小室ニシテ薰蒸氣ノ漏散セサユ様密閉シ得ヘカラシメ其内ニ竿ヲ架シ或ハ繩ヲ張リ衣服等ヲ掛ルニ便ニス其小ナルモノハ尋常ノ戸棚等ヲ以テ之ニ當ツヘシ

第三十七條 避病院ノ門側ニハ輕易ナル風呂ヲ設ケ見

舞人、看護人等外出ノ時入浴ノ用ニ供スヘシ

第三十八條 避病院ニハ別ニ清淨ナル屍室ヲ設テ患者若シ死亡シタルハ直チニ此ニ移スヘシ

但屍室ハ親族ノ弔者ヲ容ユ、カ爲メ其餘地ヲ設クヘシ

第三十九條 人家稀疎ノ村落ニ於テハ必スシモ避病院ヲ設クモ要セス若シ相當ノ空屋等アラハ假リニ之ヲ用フヘシ

第四十條 普通病院ニハ決シテ虎列刺患者ヲ入ルヘカラス

但別ニ傳染病室ノ設アルモノハ此限ニアラス

第四十一條 避病院ニ用フル看護人ノ食數ハ重症ノ患者二人ニ一人ヲ附シ輕症ノ者ニハ四人ニ一人ヲ附シ其快復ニ趣ク者ニハ六人ニ一人ヲ附スル割合ヲ以テ便宜斟酌シ晝夜交代セシムヘシ

但看護人ニハ其表記アル衣服ヲ着セシメ且ツ成ク其人ヲ交換セシメサルヲ良トス

第四十二條 避病院ニ在ル患者ノ親族又ハ別段ノ交誼アル者看護ヲ爲サンコト望ムルハ之ヲ許スヘシ但共看護人ハ多人數ヲサヌヲ要シ且ツ屢々更替

スルヲ許サ、ルヘシ

第四十三條 避病院ニ在ル患者ノ親族又ハ別段ノ交誼

アル者ハ其見舞ヲ許スヘシト雖モ室内ニ於テ飲食ヲ
嚴禁シ且ツ吐瀉物ニ接觸セサル様切ニ注意スヘシ

第四十四條 避病院ニ在ル患者ノ病況危篤ニ至ルキハ
速ニ其家ニ通知シ若シ死亡スルキハ入棺セサル前ニ
其死體ヲ家族ニ示スヘシ

第四十五條 流行ノ勢猛烈ニ及ビ其地ノ群集事業ヲ差
止ムルキハ先ツ祭禮、劇場、寄席等ヲ差止メ止ムヲ得
サル場合ニ至ラサレハ學校、製造所等ヲ差止ムヘカテ

ス又社寺參拜等ノ爲メ多人數旅行スルヲ差止ムル
ヲアルヘシ

第四項 消毒法

第四十六條 虎列刺ノ病毒ハ其吐瀉物ニ含レリ故ニ吐
瀉物及ヒ之ニ汚染スルモノハ嚴ニ消毒法ヲ行フヘシ
就中之ヲ燒滅スルヲ以テ最良法トス患者及ヒ其死體
ハ直チニ病毒ヲ傳フル者ニ非スト雖モ吐瀉物ニ汚染
スルヲ以テ亦病毒汚染物ト同視スヘシ

第四十七條 消毒法ハ其物ニ從テ區別スルヲ左ノ如シ

第一 患者及ヒ看護人等消毒法

第四十八條 患者治療ノ後始テ他人ト交通シ又ハ避病院ヨリ退出ノ節ハ必ス沐浴シ石鹼水ヲ用テ全身ヲ洗ヒ他ノ衣服若クハ消毒法ヲ施シタル衣服ヲ著スヘシ吐瀉物運搬人及ヒ避病院ノ醫師、看護人、死體取扱人等ノ他人ニ接スルキモ亦此法ニ從フヘシ

第四十九條 看護人及ヒ患者死體運搬人又ハ船中ニテ患者ト同席シタル者ノ他人ト交通スルキニハ必ス沐浴更衣スヘシ

第五十條 病家ニ於テ止ムヲ得サル事故アリテ看護人其他患者ニ親接セル者ノ他出スルキハ必ス其身體ヲ

洗淨シテ更衣スヘシ

第五十一條 自宅患者ヲ往診セル醫師及ヒ患者ノ家人ニシテ直接セサル者親戚朋友ノ一時見舞タル者等ハ消毒法ヲ行フヲ要セザレバ其家ヲ出ルニ臨テ盥漱スルヲ長トス

但著シ誤テ吐瀉物ノ爲メニ其衣服等ヲ汚シタルキハ稀薄石炭酸水(第三)ヲ噴注シ或ハ沸湯ヲ以テ之ヲ洗ヒ然ル後第六十二條第六十三條ニ依リ消毒法ヲ行フヘシ

第二 死體及ヒ排泄物等消毒法

第五十二條 死體ハ充分ニ稀薄石炭酸水(第二)ニ浸シタル單衣若クハ綿布等ヲ以テ之ヲ包ミ成タテ速ニ棺内ニ歛ムヘシ若シ濃厚石炭酸水(第二)ヲ用テ灌腸シ然ル後綿ヲ以テ肛門ヲ塞メテ得ハ最良トス

第五十三條 西洋形船舶航海中ニ死者アルキハ速ニ濃厚石炭酸水(第二)ニ浸シタル單衣若クハ綿布ヲ以テ之ヲ包ミ成タテ前條ノ灌腸ヲ行ヒ假ニ棺内ニ歛ノ通例屍室或ハ船中適宜ノ場所ヲ見計ヒ此ニ入レ置キ時々濃厚石炭酸水(第二)ヲ灌注スヘシ

但陸地ニ著スル上ハ其地方ノ警察官吏衛生委員ニ

届出處分スヘシ

第五十四條 死體ハ醫師確認ノ後速ニ火葬セシムヘシ火葬場ナキ地方ハ人家ニ離レタル所ニシテ地質鬆疎ナラサルノ地ヲ擇ヒ簡易ノ火葬場ヲ設テ之ヲ焼クヘシ

第五十五條 吐瀉物ハ之ヲ便器漱盤等ニ承ケ之ト同量ノ濃厚石炭酸水(第二)石炭酸若シ缺乏ノ時ニ際シテハ硫酸鐵合劑、硫酸鐵合劑、亞硫酸溶液、生石灰等ヲ摺用スヘシ以下之ニテ灌クヘシ其屋外ニ持出ス手續ハ第二十二條ニ依ルヘシ

第五十六條 避病院及ヒ各病家ヨリ運搬シタル吐瀉物

汚穢物ヲ燒却スルニハ其地方ニテ定メ置タル地質鬆疎ナラサル所ニ適宜ノ穴ヲ掘リ厚ク灰或ハ石灰ヲ穴底ニ敷キ乾キタル藁、鮑屑、落葉、枯草ノ類ニ石炭油ヲ澱キテ其上ニ置キ之ニ吐瀉物ヲ投シ再ヒ同前ノ燃料ヲ覆ヒテ火ヲ點スヘシ火勢減スルキハ更ニ油ヲ注キテ屢々攪挑シ全ク燒盡スルヲ期スヘシ且ツ其汚汁ノ地中ニ滲透セサル様注意スルヲ要ス

但燃料及ヒ裝置等ハ其地ノ便宜ニ隨フヘシ

第五十七條 患者ノ入りタル廁圍ノ糞汁ハ法ノ如ク燒却スヘキモ若シ大量ニシテ燒却シ難キモノハ亞流酸

溶液(第十) 糞汁ノ三分一石炭酸末(第四) 糞汁ノ五分一若シ其缺乏ニ際シテ

ハ生石灰(糞汁ノ三分一)ヲ投シテ汲取リ一定ノ所ニ埋却シ其廁圍ニハ稀薄石炭酸水(第二) 糞汁ノ五分一ヲ注入スヘシ

第五十八條 吐瀉物ノ水分多クシテ燒却シ得ザルキ之ヲ埋却スルニハ多量ノ濃厚石炭酸水(第二)若クハ亞流酸溶液(第十)ヲ灌キ一定ノ場所ニ於テ深ク埋却スヘシ但吐瀉物ノ埋却場ハ豫メ井泉河流及ヒ人家道路等ニ接近セサル地ヲ撰定スヘシ

第五十九條 吐瀉物汚穢物ヲ運搬スルニハ其地方ニ於テ豫メ取扱人夫ノ手續ヲ定メ流行ノ間ハ毎日二三回

病家ノ吐瀉物汚穢物ヲ取集メ燒却若クハ埋却セシム
ヘシ尤モ其運器ハ極テ注意シ臭氣ノ残レサル様只臭氣ヲ恐ル
ハニアラス其毒蒸發シテ空氣ニ混スルヲ恐ルナリ 相當ノ器ヲ用ヒ且ツ其汚汁少量ニシ
テ蕩溢ノ恐アレキハ鋸屑、落葉、枯草等ヲ入レテ之ヲ
防メヘシ

但運器ノ木製ナルモノハ流行終熄ノ後盡ク燒却シ
其金屬製及ヒ陶製ノモノハ稀薄石炭酸水(第三)若ク
ハ亞硫酸溶液(第十)ヲ以テ洗淨スヘシ

第六十條 食料ニ供スヘキ物品ノ現ニ病毒ニ汚染シタ
ルモノハ勿論病毒侵染ノ嫌ヒアルモノハ都テ之ヲ燒

却スベシ

但現ニ病毒ニ汚染セサルモノ其汚染ノ疑ヒアルモノ
ハ「サリシエ」酸溶液(三百倍ノ水ニ溶解セルモノ)ヲ以テ之ヲ洗淨スベシ

第三 衣服卧具等消毒法

第六十一條 衣服、卧具、蚊帳、疊、蓆等ノ甚シク吐瀉物ニ
汚染シタルモノハ之ヲ燒却スヘシ

但船中積荷ノ吐瀉物ニ汚レタルモノモ亦之ニ倣フ
ヘシ

第六十二條 衣服、卧具、蚊帳等吐瀉物ニ汚穢スル少ナ
クシテ洗濯ニ堪フヘキモノハ之ヲ桶ニ入レ稀薄石炭

酸水(第二)ヲ灌キ浸シ置クテ二十四時間ニシテ更ニ沸湯ヲ注キ四五分時ヲ經ルノ後水ヲ以テ洗淨シ日光ニ曝スヘシ石炭酸等ノ缺乏スルトキハ熱湯中ニ入レ一時以上之ヲ煮沸スヘシ

第六十三條 衣服、卧具、蚊帳等ノ少シク吐瀉物ニ汚染シ洗濯ニ堪ヘサルモノハ其品種ニヨリテ亞硫酸瓦斯(第九)若クハ石炭酸蒸氣(第三)ヲ以テ薰蒸シ或ハ熱氣消毒法ヲ行ヒシ後日光及ヒ大氣ニ曝スヘシ

第六十四條 死體ニ著セシ衣服ハ其消毒法ヲ行フテ第六十一條第六十二條及ヒ第六十三條ニ同シ

第六十五條 避病院ニ用ヒムル蚊帳ハ其病室ニ在ルテ久キヲ以テ吐瀉物ニ汚染セサレモノト雖モ都テ之ヲ煮沸シ或ハ熱氣消毒法ヲ施スヘシ

第六十六條 吐瀉物運搬人及ヒ避病院ノ醫師、看護人、死體取扱人、等ハ患者及ヒ汚穢物ニ親接スルテ久ク若クハ屢次ナルヲ以テ其衣服等ニ消毒法ヲ施ステ第六十二條第六十三條ニ同シ

但本文ニ掲クニ所ノ者日々衣服ヲ更換セハ沸湯中ニ入レ一時以上之ヲ煮沸スルヲ可トス

第六十七條 看護人及ヒ患者死體運搬人又ハ船中ニテ

患者ト同席シタル者ノ衣服手道具ハ直チニ病毒ニ汚染セサルモ稍々病毒侵染ノ疑ヒアルヲ以テ第六十三條ニ依リ消毒法ヲ行フヘシ

第四 家屋船舶等消毒法

第六十八條 患者及ヒ死體ヲ置キタル室ノ疊、蓆類ハ之ヲ柱若クハ壁ニ倚セ懸ケ戸棚等ヲ開放シ室内ニアリシ諸器具ハ之ヲ排列シ窓戸ヲ密閉シテ六時乃至八時間亞硫酸瓦斯(第九)ヲ薰シ然ル後窓戸ヲ開キ吐瀉物ニ汚染ノ嫌ヒアル板敷等ハ稀薄石炭酸水(第二)ヲ以テ之ヲ拭淨シ其他器具ハ石鹼水又ハ沸湯ヲ以テ洗淨シ充

分大氣及ヒ日光ニ曝スヘシ避病院ノ病室及ヒ屍室モ亦之ニ倣フヘシ

但金銀器書畫其他彩色ヲ施セル物及ヒ絹帛等亞硫酸ノ爲メニ其色質ヲ變化スルノ恐アルモノハ初メニ之ヲ取除ケ別ニ石炭酸蒸氣(第三)或ハ燄氣消毒法等ヲ適宜撰用スヘシ

第六十九條 患者アリタル西洋形船舶ハ其處置尋常ノ家屋ニ大異ナシト雖モ下等客室ニ至テハ衆多ノ乘客皆積荷ノ間ニ枕藉シ幾ント彼我ノ別ナキカ故ニ若シ其中ニ發病者アルハハ満室ノ乘客積荷手荷物等モ皆

病毒ニ汚染シタル者ト看做シ乗客手荷物ハ上陸ノ時充分ニ消毒法ヲ行ヒ積荷ハ其儘其室ニ於テ六時乃至八時間亞硫酸瓦斯(第九)或ハ品物ニヨリ石炭酸蒸氣(第三)ヲ薰スルノ後ニアラサレハ陸揚スルヲ許サス

第七十條 日本形小船ハ前條ノ方法ヲ斟酌シテ消毒法ヲ行ヒ海水ヲ以テ遍ク船身ヲ洗淨スヘシ

但海水モ亦消毒ノ効アルモノトス

第七十一條 避病院其他便宜ニヨリ他ノ家屋ヲ借用セシモノハ其病室ニ供セシ部分并ニ廁所ニ亞硫酸瓦斯(第九)ヲ薰シ後稀薄石炭酸水(第三)或ハ亞硫酸溶液(第十)

ヲ注キ石鹼水ヲ用ヒテ洗淨スヘシ尤モ亞硫酸蒸氣法ノ充分ナルキハ石炭酸水ヲ用フルヲ必要トセス

七十二條 病室ハ不斷換氣法ニ注意スヘシ是亦多少消毒ノ効アルモノトス

第七十三條 臨時假設ノ避病院ニシテ其保存スヘカラサレモノハ流行終ル後之ヲ取毀ツヘシ尤モ其前汚穢シタル板敷、板壁及柱等ハ濃厚石炭酸水(第二)又ハ亞硫酸溶液(第十)ヲ以テ充分ニ洗淨シ數日間開放シテ大氣ニ曝スヘシ

第五 什具運搬器等消毒法

第七十四條 吐瀉物ヲ承ケタル漱盤便器等ハ之ヲ用フ
ル毎ニ稀薄石炭酸水(第三)或ハ亞硫酸溶液(第十)ヲ以テ
洗淨スヘシ其吐瀉物ニ汚染シタル紙屑、手拭其他之ニ
類スルモノハ悉皆取集メ第二十二條ニ載セタル壺或
ハ桶ニ投シ濃厚石炭酸水(第一)或ハ亞硫酸溶液(第十)ヲ
注キ吐瀉物ト共ニ之ヲ運搬セシムヘシ

第七十五條 患者必要ノ手道具ヲ携ヘ避病院ニ入ル者
ハ出院ノ時必要ス亞硫酸瓦斯(第九)薰蒸法ヲ行ヒ之ヲ
交付スヘシ

第七十六條 患者及ヒ死體若クハ病毒ニ觸レタル物品

ヲ運ビタル舂舟車駕及ヒ運搬器等ハ稀薄石炭酸水(第
三)ヲ灌注シ更ニ石鹼水若クハ沸湯ヲ以テ洗淨スヘシ
其舂舟ノ如キハ海水ヲ以テ洗フモ可ナリ

第七十七條 病室ニ用ビタル什具ハ總テ稀薄石炭酸水
(第三)或ハ亞硫酸溶液(第十)ヲ灌キ然ル後石鹼水又ハ沸
湯ニテ洗淨シ乾カスヘシ其洗フヘカラサルモノハ病
室ニ消毒法ヲ行フノ際其内ニ排列シ漏瀆ニ堪フヘキモノハ之ヲ隔スヲ良トス 亞
硫酸瓦斯(第九)或ハ石炭酸蒸氣(第三)ヲ以テ一時間薰蒸
スヘシ

第七十八條 書籍、新聞紙ノ類病室ニアリタルモノハ之

ヲ繙展シ石炭酸蒸氣(第三)若ノハ亞硫酸瓦斯(第九)ヲ蒸
蒸スヘシ或ハ熱氣消毒法ヲ行フモ可ナリ

第七十九條 醫術器械及ヒ木製、金屬製、陶製、漆製等ノ
諸器ハ總テ稀薄石炭酸水(第三)ヲ以テ洗フヘシ

第六 廁圍溝渠等消毒法

第八十條 患者ノ入りタル廁圍及ヒ嘔吐シタル地ニハ
充分亞硫酸溶液(第十)或ハ硫酸鐵合劑(第五)ヲ注キ其廁
圍ノ糞汁ハ速ニ悉皆之ヲ汲取り相繼ノ消毒ヲ行ヒ終
ルノ間ハ他人ノ入ルヲ禁シ其嘔吐シタル地ハ速ニ之
ヲ掃除シ其土ヲ更換スヘシ且ツ其糞尿及ヒ嘔吐ノ穢

土人家遠隔ノ地ニ於テ燒却若クハ埋却スヘシ

第八十一條 糞壺及ヒ桶ノ破壞シテ病毒滲漏ノ疑ヒア
ルモノハ速ニ之ヲ掘除キ其周圍并ニ底面ノ土モ亦深
ク掘取り濃厚石炭酸水(第二)或ハ亞硫酸溶液(第十)ヲ十
分ニ灌注シテ人家遠隔ノ地ニ埋却シ其跡ニモ同様ノ
消毒藥ヲ注キ更ニ新土ヲ填ムヘシ

但其消毒藥ノ量ハ其壺中糞汁ノ多少ニ因リ斟酌ス
ヘシ大抵糞汁五分ノ一乃至三分ノ一タルヘシ嘔吐
物モ亦之ニ準ス

第八十二條 若シ誤テ吐瀉物ヲ溝渠下水等ニ投棄スル

フアルキハ十分ニ亞硫酸溶液(第十甲)或ハ硫酸硫酸鐵合劑(第六)ヲ注キ其淤泥ノ撈ヘ得ヘキモノハ之ヲ撈ヘテ人家遠隔ノ地ニ搬送シテ埋却スヘシ或ハ多量ノ水ヲ灌キテ疏通セシムヘシ

但本條ノ如キ場處ニ於テ既ニ病毒ヲ混入スルキハ消毒法モ其功ヲ奏シ難ク終ニ増殖ヲ致サシムヘシ故ニ預メ戒諭シテ誤テ之ニ投棄シ或ハ陰ニ投棄スル等ノ事ナカラシムルヲ要ス

腸窒扶私

英名 泰 裏土

ハ從來神經熱、稽留熱、腸熱、傷寒、温疫等ト

稱スルモノ多ク之ニ屬ス而シテ此病ハ時ヲ撰ハス不斷散在性トナリ或ハ地方性トナリ或ハ流行性トナリテ發スト雖モ夏月旱魃後秋涼ノ候ニ於テ最モ多ク流行スルモノナリ

此病ノ流行ハ空氣ノ不潔、飲料水ノ汚濁、食物ノ不潔等之カ因トナルモノニシテ其病毒ハ特ニ患者ノ糞尿ニ由リテ傳播スル者ナリ然レ尙其毒發疹窒扶私、天然痘等ノ如ク揮發性ノモノニ非サルヲ以テ豫防ノ方法モ亦其趣ヲ異ニシ專ラ其糞尿ニ注意スルヲ以テ緊要ノ目的ト爲スヘシ

第一項 清潔法

第一條 腸窒扶私ノ病毒ハ汚穢ノ地ニ萌動シテ飲料水ニ混シ其毒ヲ傳播セシムルノ例少カラス蓋シ是等ノ害ハ清潔法ヲ怠リ或ハ排泄物ヲ漫リニ放棄シ或ハ糞壺若クハ桶ニ破隙アル等ノ疎漏ヨリ生スルモノニシテ廁圍ト飲料水トノ注意ハ最モ肝要ナリ故ニ廁圍、芥溜、溝渠、下水等ノ掃除ヲ忽ニスヘカラス

但一處ノ水ヲ飲ム者一時ニ此病ニ罹ルト多人數ナルルキハ直チニ其水ヲ試驗シ不良ナレハ其飲用ヲ禁スヘシ

第二項 攝生法

第二條 此病ハ不潔ノ飲料水若クハ食物等ヨリ來ルモノナレカ故ニ消化シ易キ物ヲ食シ清淨ナル水ヲ飲ムヘシ若シ善良ノ水ヲ得難キルハ必ス之ヲ濾過煮沸シテ用フヘシ其他肩寒疲勞等ヲ戒ムヘシ

第三項 隔離法

第三條 醫師ノ腸窒扶私ト診斷シタルルキハ直チニ其家ノ門戸ニ病名票ヲ貼附スヘシ

但患者治癒又ハ死亡若クハ避病院ニ送致シ其病室ニ消毒法ヲ行ヒタル後ハ即チ其病名票ヲ去ルヘシ

第四條 患者ハ成タケ其室ヲ異ニシ他人ト交通ヲ絶チ看護人ハ年齢四十歳以上ノ者若クハ一回此病ニ罹リシ者ヲ撰フヘシ少壯ノ者ヲ用フヘカラス

但航海船中ニ於テ發病者アルハ本條ニ從ヒ處置スヘシ

第五條 一家ニ數人此病ニ罹ル者アルハ相當ノ看護人ヲ留メ其他ノモノハ他家ニ避退セシムヘシ

第六條 流行盛ナルニ際シ既ニ避病院ヲ設ケルニ至ラハ狹隘不潔ノ地ニ雜居シ隔離行届キ難キモノハ入院セシムヘシ

但避病院ノ位置廣狹及ヒ區別法等ハ虎列刺ノ部第三十二條以下第三十八條迄ニ照依シテ之ヲ斟酌スヘシ

第四項 消毒法

第七條 腸窒扶私患者ノ瀉下物及ヒ之ニ汚染シタル衣服、器具等并ニ其病室、廁圍、便器等ハ盡ク病毒傳播ノ恐アルヲ以テ左ノ區別ニ從ヒ消毒スベシ

第一 患者及ヒ看護人等消毒法

第八條 患者治愈ノ後始テ他人ト交通シ又久シク此患者ニ親接セシ看護人ノ他人ト交通スルハ沐浴換衣

スヘシ

第二 死體及ヒ排泄物等消毒法

第九條 死體ハ速ニ棺内ニ斂メシムヘシ若シ濃厚石炭酸水(第二)ニ浸セル綿ヲ以テ肛門ヲ塞クヲ得ハ最良トス

第十條 糞尿ハ之ヲ便器ニ承ケ稀薄石炭酸水(第二)ヲ注キ速ニ人家遠隔ノ地ニ搬送シテ之ヲ埋却スヘシ但埋却ノ地ハ井泉河流ノ近傍ヲ避クヘシ

第三 衣服卧具等消毒法

第十一條 衣服、卧具ノ糞尿ニ汚染シタルモノハ稀薄石

炭酸水(第二)ヲ以テ洗淨シ或ハ之ヲ煮沸シテ後石鹼水ヲ以テ洗淨スヘシ

第四 家屋船舶等消毒法

第十二條 患者及ヒ死體ヲ置キタル家屋船舶及ヒ避病院ノ病室屍室ハ亞硫酸瓦斯(第九)ヲ薰シ或ハ石炭酸水(第二)ヲ以テ拭淨スヘシ

但室内ハ常に注意シテ空氣ヲ流通スヘシ

第五 什具運搬器等消毒法

第十三條 什具運搬器ハ直チニ糞尿ニ汚穢スルニ非サレハ消毒ヲ要セサレモ其汚穢セルモノハ亞硫酸溶液

(第十) ナ以テ洗滌スヘシ或ハ其品種ニヨリ熱湯ヲ注キ
テ後石鹼水ヲ以テ洗フヘシ

但木製ノ便器ハ其用ヲ終ルノ後之ヲ燒却スヘシ

第六 廁圍溝渠等消毒法

第十四條 若シ誤テ患者ノ糞尿ヲ廁圍、溝渠ニ混入セシ
キハ硫酸鐵合劑(第五)ヲ注キテ之ヲ汲取り人家遠隔ノ
地ニ搬送シテ埋却スヘシ溝渠ハ「コロール」石灰ヲ撒布
シ水ヲ以テ疏通セシムベシ

赤痢

赤痢ハ一種ノ傳染病ニシテ其病毒地中ニ萌動シ人體ヲ

侵ストキハ必ス大腸ニ着キテ下痢ヲ發スルモノナリ然
シテ此患者ノ瀉下スル所ノ糞尿ハ其病毒ヲ含有シテ水
中地中或ハ氣中ニ散漫シ因テ廣ク他人ニ侵染スルニ至
ルモノトス

此病毒ノ發生ヲ助ケルハ温熱ト濕滯トニ因ルモノナレ
ハ熱滯地方ニ於テハ殆ント周歲絶ルヲナク且ツ多クハ
悪性ナリ又暖帶地方ニ於テハ季夏初秋ノ候ニ行ハルハ
ナ以テ常トス又土地ノ景況ニ從テ一地方ニ限り流行ス
ルヲアリ或ハ悪性ニシテ廣ク流行スルヲアリ此ノ如キ
時ニ臨テハ務テ豫防法ニ注意シ其宜キヲ得ハ良性ノモ

ノハ之ヲ撲滅スヘク悪性ノモノハ之ヲシテ良性ニ至ラシムルヲ得ヘシ故ニ流行ニ際シテ豫防ノ法ヲ忽ニスヘカラス

第一項 清潔法

第一條 此病毒ハ汚濕ノ土地ニ萌動シテ氣中或ハ水中ニ混シ終ニ人體ヲ侵襲スルモノナルカ故ニ廁園、溝渠、芥溜、下水及ヒ魚市、屠場等ノ不潔ナル場所ハ勿論殊ニ監獄、製造所等ハ最モ掃除ヲ嚴ニスヘシ
但一處ノ水ヲ飲ム者一時ニ此病ニ罹ルヲ多人數ナルルハ直チニ其水ヲ試験シ不良ナレハ其飲用ヲ禁

スヘシ且ツ清潔法ノ細目ハ能ク虎列刺ノ部ヲ參考シテ之ヲ斟酌スヘシ

第二項 攝生法

第二條 此病ハ老少ノ別ナク皆之ニ感スルノ素因アルカ如シト雖モ就中一回之ヲ患ヘシ者及ヒ不潔ノ地處ニ住居スル者不良ノ水ヲ飲用スル者及ヒ露卧、夜行、過度ノ勞力等都テ不攝生ノ者ハ之ニ感シ易シトス又流行ノ際ニ於テハ下利秘結モ亦此病ノ誘因トナル故ニ宜ク之ニ注意シテ攝生ノ法ヲ守ルヘシ殊ニ此病ニ罹リシ者快復ニ向ハントスルルハ更ニ飲食ノ攝生ヲ

嚴ニスヘシ些少ノ不消化物ヲ食フモ亦此病ノ再發ヲ促スノ恐アレハナリ

第三項 隔離法

第三條 此病毒ハ專ラ其瀉下物ニ在ルヲ以テ之ニ汚染セサル衣服便器、醫術器械等ハ勿論其他ノ者モ亦皆傳播ノ媒介トナル故ニ患者ヲ隔離スルヲ以テ豫防ノ第一要法トス其惡性ノモノハ最モ此注意ヲ忽ニスヘカ
ズ

第四條 醫師ノ赤痢ト診斷シタル時ハ直チニ其家ノ門戸ニ病名票ヲ貼附スヘシ

但患者治癒又ハ死亡若クハ避病院ニ送致シ其病室ニ消毒法ヲ行ヒタル後ハ即チ其病名票ヲ去ルヘシ

第五條 患者ハ其室ヲ異ニシ看護人ノ外ハ成ダケ之ニ接近スヘカラス又老幼等ハ速ニ他家ニ避退セシムヘシ

第六條 若シ一家ニ數人此病ニ罹ル者アルハ看護人ヲ留メ其他ノモノハ他家ニ避退セシムヘシ

第七條 患者ハ必ス他人ト廁圍、便器等ヲ共用セシムヘカラス其瀉下スル所ノ糞尿ハ成ダケ之ヲ便器ニ承ケ速ニ消毒法ヲ行ヒ之ヲ人家遠隔ノ地ニ搬送シテ燒却

スヘシ

但便器ハ成タケ金屬製或ハ陶製等ニシテ蓋アルモ
ノヲ長トス

第八條 患者治癒若クハ死亡ノ後ト雖モ病室ニ消毒法
ヲ行フニアラサレハ其中ニ起臥スヘカラス

第九條 航海船中ニ患者アルキハ看護人ヲ定メ便器ヲ
以テ其瀉下物ヲ承ケ毎回必ス海中ニ投棄スヘシ

但港灣及ヒ河港等ニ於テハ瀉下物ヲ投棄スヘカラ
ス最寄陸地ニ於テ之ヲ燒却スヘシ

第十條 避病院ノ位置廣狹及ヒ區別法等ハ虎列剌ノ部

第三十二條以下第三十八條迄ニ照依シテ之ヲ斟酌ス
ヘシ

第十一條 狹隘不潔ノ住居若クハ製造所、會社、學校、旅
店等ニ於テ發病スル者ハ成タケ避病院ニ送致スヘシ

第十二條 避病院看護人ノ分配、來訪人ノ處置等ハ虎列
剌ノ部第四十一條ヨリ第四十四條迄ニ照依シテ之ヲ
斟酌スヘシ

第十三條 普通病院アル地方ニ於テハ院内ヲ區隔シ避
病室トナシ患者ヲ入ルヘシ又人家稀疎ノ村落ニ於テ
ハ相當ノ空屋ヲ用フルモ可ナリ

第四項 消毒法

第十四條 患者ノ瀉下物及ヒ之ニ汚染セル衣服、卧具等并ニ病室、廁圍、便器等ハ盡ク病毒傳播ノ恐アルヲ以テ左ノ區別ニ從ヒ消毒スヘシ

第一 患者及ヒ看護人等消毒法

第十五條 患者治愈ノ後始テ他人ト交通シ又ハ避病院ヨリ退出ノ節ハ必ス沐浴シ石鹼水ヲ用テ全身ヲ洗ヒ他ノ衣服若クハ消毒法ヲ施セシ衣服ヲ着スヘシ瀉下物運搬人及ヒ避病院ノ醫師、看護人、死體取扱人等ノ他人ニ接スルキモ亦此法ニ從フヘシ

第十六條 看護人及ヒ患者死體運搬人ノ他人ト交通スルキニハ必ス沐浴更衣スヘシ

第二 死體及ヒ排泄物等消毒法

第十七條 死體ハ充分ニ稀薄石炭酸水(第二)ニ浸シタニ單衣若クハ綿布等ヲ以テ之ヲ包ミ成タケ速ニ棺内ニ歛ムヘシ若シ濃厚石炭酸水(第二)ヲ用テ灌腸シ然ル後綿ヲ以テ肛門ヲ塞クヲ得ハ最良トス

但此患者ノ死體ハ最モ腐敗シ易キヲ以テ速ニ棺内ニ歛メ且ツ成タケ速ニ之ヲ火葬若クハ埋葬セシムヘシ

第十八條 便器ニ承ケタル瀉下物ハ農厚石炭酸水(第一)或ハ硫酸鐵合劑(第五)硫酸硫酸鐵合劑(第六)亞硫酸溶液(第十)等ヲ混和シ屋外ニ持出シ壺或ハ桶ニ入レテ密蓋シ人家遠隔ノ地ニ搬送シテ燒却スベシ其燒却法ハ虎列刺ノ部第五十六條ヲ參照スヘシ

第十九條 甚シク瀉下物ニ汚染シタル紙及ヒ綿布等ハ悉皆取集メ之ヲ燒却スベシ

第三 衣服卧具等消毒法

第二十條 衣服、卧具、蚊帳、疊、蓆等ノ甚シク瀉下物ニ汚染シタル者ハ之ヲ燒却スヘシ其汚穢スル少ナクメ洗

濯シ得ヘキ者ハ之ヲ桶ニ入レ稀薄石炭酸水(第三)ヲ灌キ浸シ置クヲ二十四時間ニシテ更ニ沸湯ヲ注キ四五分時ヲ經ルノ後水ヲ以テ洗淨シ日光ニ曝スヘシ若シ石炭酸等ノ缺乏スルキハ熱湯中ニ入レ一時以上之ヲ煮沸スヘシ

第二十一條 其少ク瀉下物ニ汚染シ洗濯スヘカラサルモノハ其品種ニヨリ亞硫酸瓦斯(第九)若クハ石炭酸蒸氣(第三)ヲ以テ薰蒸シ或ハ熱氣消毒法ヲ行ヒ後日光及ヒ大氣ニ曝スヘシ

第二十二條 死體ニ着ヤシ衣服ノ消毒法ハ前二條ニヨ

リ之ヲ施スヘシ

第二十三條 瀉下物運搬人及ヒ避病院ノ醫師、看護人、死體取扱人等ハ患者及ヒ汚穢物ニ久シク觸接セルヲ以テ其衣服等ニ消毒法ヲ施ス。第二十條第二十一條ニ依ルヘシ

但日々衣服ヲ更換スル者ハ沸湯ニ入レ一時以上之ヲ煮沸スルヲ以テ足レトス

第二十四條 看護人及ヒ患者死體運搬人ノ衣服、手道具等直チニ病毒ニ汚染セサルモ稍々浸染ノ疑アルモノハ石炭酸蒸氣(第三)或ハ亞硫酸瓦斯(第九)ヲ以テ薰蒸シ

日光及ヒ大氣ニ曝スヘシ

第四 家屋船舶等消毒法

第二十五條 患者及ヒ死體ヲ置キタル室ノ畳、蓆類ハ之ヲ柱若クハ壁ニ倚セ掛ケ戸棚等ヲ開放シ室内ニアリシ諸器具ハ此ヲ排列シ窓戸ヲ密閉シテ六時乃至八時間亞硫酸瓦斯(第九)ヲ薰シ然レ後窓戸ヲ開キ病毒附着ノ恐アル板敷等ハ稀薄石炭酸水(第三)ヲ撒布シ更ニ之ヲ拭淨シ其他器具ハ石鹼水又ハ沸湯ヲ以テ洗淨シ充分大氣及ヒ日光ニ曝スヘシ避病院ノ病室及ヒ屍室モ亦之ニ倣フヘシ

但亞硫酸ノ爲メ其色質ヲ變化スルノ恐アルモノハ石炭酸蒸氣(第三)或ハ熱氣消毒法等ヲ採用スヘシ輕症痢病ノ如キハ必スシモ本條ノ處置ヲ要セス醋水若クハ「コロール」水ニテ室内ヲ拭淨スルヲ以テ足レリトス

第二十六條 患者アリタル船室ノ消毒法モ亦前條ニ同シ

第二十七條 普通病院ニシテ區隔セシ病室及ヒ一時假用セシ家屋等ノ消毒法モ亦前條ニ同シ
但病室ハ數多ノ患者交々此内ニ入ルヲ以テ惡性ノ

痢病ナラサルモ尙ホ前條ノ消毒法ヲ用フヘシ

第五 什具運搬器等消毒法

第二十八條 便器ハ之ヲ用フル毎ニ稀薄石炭酸水(第三)亞硫酸溶液(第十)ヲ以テ洗滌スヘシ

第二十九條 患者及ヒ死體若クハ瀉下物ニ汚染シタル物品ヲ運ビタル諸器ハ稀薄石炭酸水(第三)ヲ灌注シ更ニ石鹼水若クハ沸湯ヲ以テ洗滌スヘシ

第三十條 病室内ニ用ビタル什具及ヒ醫用器械等ハ稀薄石炭酸水(第三)或ハ亞硫酸溶液(第十)ヲ注キ然ル後沸湯ニテ洗淨スヘシ

第六 廁圍溝渠等消毒法

第三十一條 患者ノ入りタル廁圍ハ他人ノ入りヲ禁シ
亞硫酸溶液(第十)或ハ硫酸鐵合劑(第五)ヲ注キ其瀉下物
ハ速ニ之ヲ汲取り人家遠隔ノ地ニ搬送スヘシ而シテ
其糞壺ニハ復々同様ノ消毒法ヲ行フヘシ

第三十二條 糞壺及ヒ桶ノ破壊シテ病毒滲漏ノ疑アル
モノハ之ヲ掘除ケ其周圍ノ土ヲ掘取り濃厚石炭酸水
(第二)或ハ亞硫酸溶液(第十)ヲ充分ニ灌注シ人家遠隔ノ
地ニ搬送シテ埋却スヘシ

但消毒藥ノ量ハ其壺中糞量五分一乃至三分ノ一ヲ

トヘシ

第三十三條 若シ誤テ吐瀉物ヲ溝渠下水等ニ投棄スル
トアルハ充分ニ亞硫酸溶液(第十)或ハ硫酸硫酸鐵合
劑(第六)ヲ注キ其淤泥ノ撈ヘ得ヘキ者ハ之ヲ撈ヘテ人
家遠隔ノ地ニ搬送シテ埋却スヘシ或ハ多量ノ水ヲ灌
キテ疏通セシムヘシ

但本條ノ如キ場處ニ於テ既ニ病毒ヲ混入スルハ
消毒法モ其功ヲ奏シ難ク終ニ増殖ヲ致サシムヘシ
故ニ豫メ戒諭シテ誤テ之ニ投棄シ或ハ陰ニ投棄ス
ル等ノ事ナカラシムルヲ要ス

實布埏利亞

實布埏利亞ハ一種ノ猛烈ナル傳染病ニシテ其毒ハ患者ノ痰唾、涕汁等ニ含トリ又呼出スル所ノ空氣モ其毒ヲ包含スルヲ以テ之ニ觸ル、時ハ老少ニ論ナク皆之ニ感スルモノナリ而シテ幼穉ノ者ハ之ニ罹ルヲ最モ多クシテ且ツ危險ナリトス抑々此病毒ハ其發生時季ヲ擇ハス又風土ニ關涉スルヲナク不斷散在スルヲアリ又一時ニ廣ク流行スルヲアリ此症ハ必ス咽喉ニ發スルモノニシテ之カ爲メニ其部ノ壞爛ヲ致シ甚シキモノハ須臾ニシテ斃ル故ニ從來喉風、喉痺、馬痺風、纏喉風、咽氣ト唱フルモ

ノ、中亦往々之レ有リ此病ハ患者ニ觸接セサルモ尙ホ感染ノ恐アルモノニシテ且ツ其毒久ク消滅セサルカ故ニ隔離消毒ノ方法ヲ忽ニスヘカラス

第一項 清潔法

第一條 此病流行ノ際ハ務テ一般清潔法ニ注意シ既ニ發病スルトキハ其室内ノ掃除ヲ怠ルヘカラス家屋、衣服等清潔ニシテ且ツ隔離法充分ナルキハ廣ク流行ニ至ラスシテ消熄スルヲ得ヘシ

第二項 攝生法

第二條 此病ハ殊ニ咽喉ヲ侵スモノニシテ既ニ些少ノ

咽喉炎アルモノハ自カラ侵襲ヲ被リ易シ故ニ専ラ口内、喉頭、氣管等ノ炎症ヲ誘發スベキ事件ヲ戒メ常ニ含漱スルヲ長トス

但其誘發スヘキ事件トハ頸圍ヲ温保セシモノ驟カニ寒冷ニ肩觸シ或ハ苛烈ノ飲食料ヲ用ヒ或ハ高談放歌シ或ハ幼稚ヲシテ頻ニ號泣セシメ及ヒ小學校ニ於テ妄ニ高聲ヲ發シ讀書唱歌セシムル等ニシテ皆宜ク之ヲ戒シムヘシ

第三項 隔離法

第三條 醫師ノ實布埜利亞ト診斷スルキハ其家ノ門戶

ニ病名票ヲ貼附スヘシ

但患者治愈或ハ死亡若クハ避病院ニ送致シ其病室ニ消毒法ヲ行ヒタル後ハ即チ其病名票ヲ去ルヘシ

第四條 此病ハ患者ニ接觸シ或ハ患者ノ痰唾ニ汚染セル物品若クハ室内ノ空氣ヨリ傳染スルヲ以テ患者ハ速ニ之ヲ隔離シ看護人ノ外ハ漫ニ接近セシム可ラス殊ニ小兒ヲ遠サクヘシ

但室内ノ空氣ハ常ニ清鮮ナラシムルヲ要ス

第五條 病兒ハ健兒ト共ニ遊戲セシムヘカラス又學校等ニ行カシムヘカラス

第六條 病室内ニハ不用ノ衣服及ヒ器具ヲ置クヘカラス

第七條 患者ノ用フル所ノ飲食器及ヒ玩具等ハ他人ト共用スヘカラス

第八條 若シ其流行ノ勢盛ニシテ避病院ヲ要スルトアルキハ普通病院ヲ區隔シ或ハ相當ノ空屋ヲ以テ之ニ充ル等其便宜ニ任スヘシ

第九條 避病院ヲ設ルキハ別ニ清淨ナル屍室ヲ設ケ患者死亡シタルキ之ニ移スヘシ

但屍室ハ親族ノ弔者ヲ入ルカ爲メ豫メ其餘地ヲ設

クヘシ

第十條 避病院ニ在ル患者ノ親戚又ハ別段ノ交誼アル者看護ヲ爲サンテ望ムキハ之ヲ許スヘシ

但屢々交替スルハ許スヘカラス

第四項 消毒法

第十一條 此病毒ハ患者ノ痰唾及ヒ呼氣或ハ滲汁等皆之ヲ傳送物アリ故ニ此等ノ排泄物ニ汚染シタル物ハ必ス消毒法ヲ行フヘキモノトス

第十二條 消毒法ハ其物ニ從テ區別スルト左ノ如シ

第一 患者及ヒ看護人等消毒法

第十三條 患者治愈ノ後他人ト交通シ又ハ避病院ヨリ退出ノ節ハ必ス沐浴シ石鹼水ヲ用テ全身ヲ洗ヒ他ノ衣服若クハ消毒法ヲ施シタル衣服ヲ着スヘシ看護人及ヒ避病院ノ醫師、看護人、死體取扱人等ノ他人ニ接スルキモ亦此法ニ從スベシ

第十四條 自宅患者ヲ往診セシ醫師及ヒ患者ノ家人ニシテ直接セサル者親戚朋友ノ一時見舞タル者等其室ヲ出ルキハ必ス盥漱スヘシ

第二 死體及ヒ排泄物等消毒法

第十五條 死體ハ醫師確認ノ後速ニ棺内ニ歛メシムヘシ

シ若シ濃厚石炭酸水(第一)ニ浸シタル綿ヲ以テ口鼻ヲ栓塞スルヲ得ハ最良トス

但死體ハ成ク火葬スルヲ良トス

第十六條 痰唾及ヒ滲汁等ヲ拭ロタル手巾及ヒ紙、綿布ノ類ハ悉皆取集メ之ヲ燒却スヘシ

但水分剰多ニシテ燒盡シ難キモノハ稀薄石炭酸水(第二)ヲ注キ人家遠隔ノ地ニ搬送シテ埋却スヘシ

第三 衣服卧具等消毒法

第十七條 衣服、卧具ノ甚シク汚穢シタルモノハ之ヲ燒却スルヲ良トス其儘ニ穢レタルモノハ稀薄石炭酸水

(第二)ヲ注キ浸シ置ノ、二十四時間ニシテ更ニ沸湯ヲ注キ且ツ洗滌シ日光ニ曝スヘシ或ハ亞硫酸瓦斯(第九)ヲ以テ薰蒸セシ後日光及ヒ大氣ニ曝スヘシ

第四 家屋船舶等消毒法

第十八條 此病毒ハ極テ頑強ニシテ善ク粗糙ナル物ニ附着スルカ故ニ最モ注意レテ下條ノ消毒法ヲ充分ニ行フヘシ

第十九條 患者及ヒ死體ヲ置タル病室ノ壁、簾類ハ之ヲ柱ニ倚セ掛ケ戸棚等ヲ開放シ窓戶ヲ密閉シテ六時乃至八時間亞硫酸瓦斯(第九)ヲ薰シ然レ後窓戶ヲ開キ壁、

簾、壁、障等ニハ更ニ稀薄石炭酸水(第二)ヲ撒布シ或ハ之ヲ以テ拭淨シ其他棚架及ヒ板敷等ハ石鹼水又ハ沸湯ヲ以テ洗淨シ充分大氣及ヒ日光ニ曝スヘシ避病院ノ病室、屍室及ヒ普通病院ノ區隔セシ病室又ハ臨時假用セシ家屋モ亦之ニ倣フヘシ

但亞硫酸ノ爲ノニ其色質ヲ變化スルノ恐アルモノハ石炭酸蒸氣(第三)或ハ焚氣消毒法等ヲ採用スヘシ

第五 什具運搬器等消毒法

第二十條 病室ニ用レル什具飲食器及ヒ玩具等ノ甚シク汚穢シタルモノハ之ヲ燒却スヘシ其燒却スヘカ

ラサル者ハ稀薄石炭酸水(第二)或ハ亞硫酸溶液(第十)ヲ
灌キ然ル後石鹼水又ハ沸湯ニテ洗淨スヘシ其洗フヘ
カラサレモノハ病室ニ消毒法ヲ行フノ際其内ニ排列
シハ之ヲ濕スヲ良トス 亞硫酸瓦斯(第九)或ハ石炭酸蒸氣(第
三)ニテ一時間薰蒸スヘシ然ラサレハ室外へ出スヘカ
ラス

第二十一條 患者ノ玩弄セシ圖書書籍ノ類ハ之ヲ播展
シ石炭酸蒸氣(第三)或ハ亞硫酸瓦斯(第九)ヲ薰蒸スヘシ
第二十二條 患者及ヒ死體ヲ運搬セシ器具等ハ稀薄石
炭酸水(第二)ヲ灌注シ更ニ石鹼水若クハ沸湯ヲ以テ洗

淨スヘシ其舂舟ノ如キハ海水ヲ以テ洗フモ可ナリ
第二十三條 醫術器械等ノ木製及ヒ金屬製ニシテ病毒
ニ接觸シタルモノ例ヘハ壓舌筥ノ如キハ總テ稀薄石
炭酸水(第二)ヲ以テ洗フヘシ

發疹室扶私

發疹室扶私英名泰扶私ハ特異ノ揮發性傳染毒ニシテ飢饉熱、軍
陣疫、囚獄熱等ノ稱アリ從來腐敗熱、神經熱、發斑熱、温疫、
傷寒ト唱ヘシモノ、中ニモ亦此病アルヲ多シ其病タル
ヤ地方ヲ撰ハス氣候ニ關セス流行スルト雖モ多クハ衆
人群集大氣流通ノ不佳ナル所ニ萌動シ衣服身體ノ不潔

或ハ飲食ノ不良不足及ヒ過度ノ勞力、露臥、夜行其他身體ヲ衰弱セシムル事項ヲ誘因トシ傳染蔓延スルモノナリ其流行スルニ及テハ貴賤老幼ノ別ナク其誘因アルカ或ハ隔離法ノ行届サレヨリ倍々傳染ノ勢ヲ盛ニシ動モスレハ年ヲ亘リ消滅セサルヲアリ故ニ此病ノ豫防法ハ最モ忽ニスヘカラサレモノトス

第一項 清潔法

第一條 發疹室扶私ノ病毒ハ不潔、狹隘、空氣ノ汚濁ヨリ生スルモノナレハ其發現スルニ當テ囚獄、兵營及ヒ製造所、貧院、棄兒院其他群集雜居稠密ノ場所ハ勿論

一般ノ家屋タリ凡掃除ニ怠ラス務テ清潔ニシテ且ツ空氣ヲ疏通セシムヘシ最モ其身體ニ切ナク清潔法ヲ至要トシ日々沐浴シ衣服ノ洗濯ヲ怠ルヘカラス殊ニ病毒ノ發生ヲ助クヘキ一切ノ汚穢物即チ廁圍、芥溜、溝渠等ノ掃除ニ注意ヲ加フヘシ

第二條 避病院病室ニ於テ用フル所ノ卧具ハ無色若クハ淡色ノモノヲ要スベシ其汚染ノ見易キカ爲メナリ自宅療養ノ者モ亦同様ノ注意ヲ要スヘシ

第二項 攝生法

第三條 此病ニ感スルノ素因ハ各人多クハ之ヲ有スト

雖モ就中飢饉ノ窮民、軍陣ノ兵卒、監獄ノ囚徒等ノ如キハ其居處及ヒ攝生ノ不良ナルヨリ此病ニ罹ルモノ多シトス夫レ飢饉ノ時ニ當テハ攝生ノ事皆其宜キヲ得スト雖モ其最モ甚シキハ食物ノ不足ト不良トニアリ故ニ衛生官吏ハ務テ其食品中成クテ滋養分多キモノヲ撰ヒ有害ノ物ヲ指示シテ之ヲ避ケシムヘシ

第四條 兵卒ノ軍陣ニ在ルキハ固ヨリ攝生ノ方ヲ講スルニ違ナカルヘシト雖モ若シ一人發病スルキハ直チニ全軍ニ波及スルノ虞アルヲ以テ成ルダケ無用ノ露卧過勞ヲ慎ミ且ツ飲料ノ良否ニ注意ヲ加フヘシ囚獄、

懲役場ノ如キハ流行ノ際殊ニ空氣ノ流通及ヒ其食物ニ注意ヲ加ヘ工役等モ過度ナラシメサルヲ要ス一旦病毒ノ蔓延スルニ至テハ高貴豪富ノ人ト雖モ猶其傳染ヲ免ル、能ハス是各人其素因アルヲ證スルニ足ル故ニ此時ニ當テハ務テ身體ノ溫度ヲ適宜ニ保持シ飲食ヲ攝シテ過度ノ勞力ヲ爲スヘカラス且ツ夜氣、風雨等ノ感冒及ヒ身體ヲ衰弱セシムルノ諸件ヲ戒ムヘシ

第三項 隔離法

第五條 醫師發疹瘰癧私ト疹斷シタルキハ直チニ其家ノ門閉ニ病名票ヲ貼附スヘシ

但患者治癒又ハ死亡若クハ避病院ニ送致シ其室ニ消毒法ヲ行ヒタル後ハ即チ其病名票ヲ去ルヘシ

第六條 發疹室扶私ハ其毒揮發性ニシテ患者ノ皮膚、蒸發氣、呼氣ヨリ發スルモノナレハ直チニ患者ニ接觸セサルモ尙ホ之ヲ感受スルアリ故ニ患者ノ身體ヲ以テ皆病毒ナリト看做スヘシ又患者數名ヲ狹隘ノ一室ニ入ルルハ病毒稠厚トナリ感染ノ勢益々烈ク此室内ニ入ルモノ忽チ其病害ヲ受ルノ恐アリ故ニ患者ハ速ニ之ヲ隔離シ且ツ相當ノ廣室ニ移サ、ルヘカラス

第七條 病室ハ適宜ニ窓戶ヲ開キ換氣法ニ注意シ常ニ

其内ノ空氣ヲ清鮮ナラシメ看護人ノ外必ス接近セシムヘカラス

第八條 家族中ニ於テモ看護人ヲ定メ止ムヲ得サル事故アルノ外他人ト交通ヲ絶テ又老幼等ハ成タテ速ニ他家ヘ避退セシムヘシ否ラサレハ管ニ其害ヲ受ルノミナラス之カ媒介トナリ大ニ傳播スルノ恐アレハナリ

但家人ト雖モ要用アルノ外其室内ニ入ルヘカラス若シ外人ノ要用アリテ來ルルキハ戶外ニ於テ之ヲ辨スヘシ且ツ看護人ハ成タテ更換スヘカラス是レ其

揮發毒ノ衣服等ニ附着シテ廣ク他人ニ傳染スレハナ
リ

第九條 病室内ニハ不用ノ器具ヲ置クヘカラス殊ニ毛
布ノ類ハ其病毒ヲ包含シ易キカ故ニ必要ノ外決シテ
之ヲ置クヘカラス

第十條 此病ハ死體ヨリモ尙ホ其病毒ヲ發出シ以テ感
染セシムルノ例少ナカラス故ニ死體ニハ速ニ消毒法
ヲ行フヘシ死體ニ沐浴セシメ或ハ屍傍ニ接近スル等
ノフハ決シテ爲スヘカラス

第十一條 患者治癒死亡ノ後ハ病室ニ消毒法ヲ行ハス

週間窓戶ヲ開放シ風氣ヲ流通スヘシ蓋シ消毒ノ後ト
雖モ即チ室内ニ起卧スルハ傳染ノ恐ナキニアラサ
ルカ故ナリ

第十二條 船舶中ニ此病ヲ發スル者アルハ速ニ其室
ヲ異ニシ看護人ノ外交通ヲ絶ツテ尙ホ人家ニ於ルカ
如クスヘシ

但此病ハ動モスレハ衆人群集セシ船室ニ發シ又船
中飲食ノ不良不足等其素因トナルカ故ニ若シ患者
アラハ速ニ之ヲ隔離シ室内ノ清潔法ニ注意スヘシ
第十三條 製造所、會社、學校、旅店等其他衆人群集ノ處

ニ於テ發病セシ者アラハ成タケ速ニ之ヲ避病院ニ送
ルヲ良トス若シ避病院ナク他ニ相當ノ空屋アラハ直
ニ此ニ送致スヘシ然レモ其發病セシ所ノ室廣潤ニ
シテ且ツ他人ト充分ニ隔離スルヲ得ハ必シモ他ニ送
ルヲ要セサレヘシ

第十四條 避病院ノ位置ハ人家ニ接近セス且ツ恒風ノ
上ニアラサル地ヲ撰ヒ必ス往來繁多ノ路傍等ニ置ク
ヘカラス

但共門前ニ高ク病名標旗ヲ掲クヘシ

第十五條 避病院ノ建築ハ簡易ヲ旨トシ善美ヲ要セス

是レ流行終熄ノ後焼却スルヲ良トスレハナリ

第十六條 避病院ノ病室ハ最モ潤大ナレヲ要スル故ニ
患者一人ニ二坪半ト見積リ其人數ノ概計ハ虎列刺第
三十四條ニ載セタル割合ニ從ヒ之ヲ設クヘシ其他醫
師詰所、事務所、看護人休息所並ニ簡易ノ蒸氣室等ヲ
設クヘシ 虎列刺第三
十六條參照

第十七條 避病院ノ門側ニ輕易ナル風呂ヲ置キ看護人、
見舞人等退出ノ時必ス之ニ浴セシムルヲ良トス又病
室ハ空氣ヲ流通セシメンカ爲メ窓戶ヲ開キ冬時ハ暖
爐ヲ置キ其温度ヲ適宜ニシテ空氣ノ代謝ヲ助クヘシ

但患者退院若クハ死亡スルノ後ハ毎回其病室存ニ消毒法ヲ行フヘシ

第十八條 避病院ニハ清淨ナル屍室ヲ設ケ患者若シ死亡シタルキハ直チニ之ニ遷シ病室ニ留置クヘカラス但其屍室ニハ親族ノ弔者ヲ入ルカ爲メ其餘地ヲ設クベシ其弔者ハ成ダケ速ニ來ルヘキ手續ヲ爲スヲ要ス此病ハ死體モ亦發毒ヲ逞フスルモノナレハ必ス久ク留置クヘカラス

第十九條 人家稀疎ノ村落ニ於テハ必スシモ避病院ヲ要セス若シ相當ノ空屋アラハ之ヲ假用シ或ハ苫葺等

ノ屋舎ヲ假設スルモ可ナリ

第二十條 尋常ノ病院ニハ決シテ此患者ヲ入ルヘカラス若シ院内ニ從來傳染病室ノ設アリテ充分ニ隔離法消毒法ヲ行ヒ得ヘキノ目的アルモノハ入院ヲ許スベシト雖モ尋常ノ病院ヲ區隔シテ之ヲ用フヘカラス

第二十一條 避病院看護人ノ負數ハ重症ノ患者ニハ二人ニ一人ヲ附シ輕症ノ者ニハ四人ニ一人ヲ附シ其快復ニ赴ク者ニハ六人ニ一人ヲ附スル割合ヲ以テ便宜斟酌シ且ツ晝夜交代セシムヘシ

但看護人ニハ其表記アル衣服ヲ着セシメ且ツ成ダ

ナ其人ヲ更換セシムヘカラス

第二十二條 避病院ニ在ル患者ノ親族又ハ別段ノ交誼

アル者看護ヲ爲サンコト望ムルハ之ヲ許スヘシ

但共看護人ハ多人數ナラサルト要シ且ツ屢々更替
スルトナ許スヘカラス

第二十三條 避病院ニ轉ヘ來リシ衣服、手道具等ハ別室

ニ置コト長トス

第二十四條 患者ノ親族又ハ別段ノ交誼アル者來訪ス

ルモ成メケ室内ニ入ルトナ許サ、ルト長トス

第二十五條 此病ハ揮發性ニシテ一時ニ衆人ヲ侵シ若

シ一人發病スルトハ其衣服等ニ附着セル病毒忽チ傳
播シ大ニ流行ノ媒介トナルヲ以テ流行ノ際ニハ成メ
テ衆人群集スルトノ事業ヲ差止メ且ツ社寺參拜等ノ爲
メ多人數旅行スルトナ差止ムコトアルヘシ

第四項 消毒法

第二十六條 此病毒ハ患者及ヒ死者ノ身體ヨリ發シテ
衣服、臥具、器具ハ勿論居室ノ畳、蓆、屏障等ニ至ルマテ
盡ク附着シテ其病毒久ク潜匿スルモノナレハ病體及
ヒ死體ニ近接セシモノハ都テ病毒ト同視シ消毒法ヲ
行フコト要ス

第二十七條 消毒法ハ其物ニ從テ區別スルヲ左ノ如シ

第一 患者及ヒ看護人等消毒法

第二十八條 患者治愈ノ後始テ他人ト交通シ又ハ避病院ヨリ退出ノ節等ハ必ス沐浴シ石鹼水ヲ用テ全身ヲ洗ヒ他ノ衣服若クハ消毒法ヲ施シタル衣服ヲ着スヘシ看護人及ヒ患者死體運搬人並ニ避病院ノ醫師、死體取扱人及ヒ船中ニテ患者ト同席セシ者等佻人ト交通スル時モ亦此法ニ從フヘシ

第二十九條 自宅患者ヲ往診セシ醫師及ヒ患者ノ家人ニシテ直接セサル者親戚朋友ノ一時見舞タル者ハ成

クケ石鹼水或ハ醋水ニテ顔面及ヒ手ヲ洗拭スヘシ

第二 死體及ヒ排泄物等消毒法

第三十條 死體ハ充分ニ稀薄石炭酸水(第二)ニ浸シタル單衣若クハ綿布ヲ以テ之ヲ包ミ速ニ棺内ニ歛ムヘシ但死體ハ成メケ之ヲ火葬スルヲ長トス

第三十一條 西洋形船舶航海中ニ死者アルキハ速ニ濃厚石炭酸水(第一)ニ浸シタル單衣若クハ綿布ヲ以テ之ヲ包ミ假ニ棺内ニ歛メ通常屍室或ハ船中適宜ノ場所ヲ見計ル此ニ入レ置キ時々濃厚石炭酸水(第二)ヲ灌注スヘシ

但陸地ニ着スルハ速ニ其地方ノ警察官吏衛生委
員ニ届出處分スヘシ

第三十二條 此病ハ必シモ排泄物ヨリ傳染セスト雖モ
空氣ヲ汚スノ恐アルヲ以テ成ダケ速ニ之ヲ取除ケ病
室内ニ留置ヘカラス

第三 衣服卧具等消毒法

第三十三條 患者ノ久ク着シタル衣服、卧具ノ汚垢ニ染
ミタル者、又ハ死體ニ直接シタル卧具、避病院ニテ用
ヒタル卧具、蚊帳等ハ成ダケ焼却スルヲ良トス其焼却
ヲ憚ルヘキモノニシテ洗濯スヘキハ之ヲ桶ニ入レ稀

薄石炭酸水(第二)ヲ灌キ浸シ置クフ二十四時間ニシテ
更ニ沸湯ヲ注キ四五分時ヲ經ルノ後水ヲ以テ洗淨シ
日光ニ曝スヘシ石炭酸等若シ缺乏スルハ熱湯中ニ
入レ一時以上煮沸スヘシ

第三十四條 同前ノ品種ニシテ洗濯スヘカラサレモノ
ハ亞硫酸瓦斯(第九)石炭酸蒸氣(第三)ヲ以テ薰蒸シ或ハ
熱氣消毒法ヲ行ヒ後日光及ヒ大氣ニ曝スヘシ

第四 家屋船舶等消毒法

第三十五條 患者及ヒ死體ヲ置キタル室ノ疊蓆類ハ之
ヲ柱若クハ壁ニ倚セ掛ケ戸棚等ヲ開放シ室内ニアリ

シ諸器具ハ之ヲ排列シ窓戶ヲ密閉シテ六時乃至八時
間亞硫酸瓦斯(第九)ヲ薰シ然ル後窓戶ヲ開キ病毒附着
ノ恐アル柱、板敷等ハ稀薄石炭酸水(第三)ヲ撒布シ更ニ
之ヲ拭淨シ其他器具ハ石鹼水又ハ沸湯ヲ以テ洗淨シ
充分大氣及ヒ日光ニ曝スヘシ避病院ノ病室及ヒ屍室
モ亦之ニ倣フヘシ
但金銀器、書畫其他彩色ヲ施セシ物及ヒ絹帛等亞硫
酸ノ爲メニ其色質ヲ變化スルノ恐アル者ハ初ニ之
ヲ取除テ別ニ石炭酸蒸氣(第三)或ハ變氣消毒法等ヲ
適宜選用スヘシ

第三十六條 患者アリタル西洋形船舶ハ其處置尋常ノ
家屋ニ大異ナレト雖モ下等客室ニ至テハ衆多ノ乘客
皆積積ノ間ニ枕藉シ幾ント彼我ノ別ナキ故ニ若シ
其中ニ發病者アルキハ満室ノ乘客、積積、手荷物ハ皆
病毒ニ侵染レタル者ト看做シ乘客手荷物ハ上陸ノ時
充分ニ消毒法ヲ行ヒ積積ハ其儘其室ニ於テ六時乃至
八時間亞硫酸瓦斯(第九)或ハ品種ニヨリ石炭酸蒸氣(第
三)ヲ薰スルノ後ニ非サレハ陸揚スルヲ許サス
第三十七條 日本形小船ハ前條ヲ斟酌シテ消毒法ヲ行
ヒ海水ヲ以テ普ノ船身ヲ洗フヘシ

第三十八條 尋常家屋ヲ避病院ニ假用セシモノハ其病室トナセシ部分ハ亞硫酸瓦斯(第九)ヲ薰セシ後稀薄石炭酸水(第二)或ハ亞硫酸溶液(第十)ヲ洒キ石鹼水ヲ以テ洗淨スヘシ

第三十九條 病室ハ不斷換氣法ニ注意スヘシ是亦多少消毒ノ効アルモノトス

第四十條 避病院ハ流行ノ後成タケ焼却スルヲ良トス否ラサレハ先ツ汚穢シタル板敷、板壁及ヒ柱等ハ濃厚石炭酸水(第二)又ハ亞硫酸溶液(第十)ヲ以テ充分ニ洗淨シ數日間開放シテ大氣ニ曝シ然ル後之ヲ取毀ツヘシ

第五 什具運搬器等消毒法

第四十一條 病室ニ用ロタル什具ハ總テ稀薄石炭酸水(第二)或ハ亞硫酸溶液(第十)ヲ灌キ然ル後石鹼水又ハ沸湯ニテ洗淨スヘシ其洗フヘカラサレモノハ病室ニ消毒法ヲ行フノ際其内ニ排列シ濕潤ニ堪フヘキモノハ之ヲ濕スヲ良トス亞硫酸瓦斯(第九)或ハ石炭酸蒸氣(第三)ヲ以テ一時間薰蒸スヘシ

第四十二條 書籍新聞紙ノ類病室ニアリタルハ之ヲ繙展シ石炭酸蒸氣(第三)若クハ亞硫酸瓦斯(第九)ヲ薰スヘシ或ハ熱氣消毒法ヲ行フモ可ナリ

第四十三條 醫術器械及ヒ職人手道具其他木製、金屬

製、陶製、漆製ノ諸器類ハ總テ稀薄石炭酸水(第二)以テ洗フヘシ

痘瘡

痘瘡ノ病毒ハ揮發性及ヒ固性傳染毒ニメ全ク患者ノ身體ヨリ發出シ又ハ死體及ヒ痘漿、痘痂ニ直接シテ感染スルノミナラス其患者ニ接觸セシ衣服、卧具其他一切ノ物ヨリモ傳染シ又其病室内ノ空氣、塵埃モ之カ媒介トナリテ其病毒ヲ傳送スルモノトス
痘瘡ハ古來ヨリ全世界ニ發現シ殊ニ惡性流行スルキハ其勢猖獗ニシテ無數ノ人衆ヲ害シ良醫モ亦手ヲ束テ其

術ヲ施スヘカラサルアリ但人生一回此病ニ罹ルキハ感受姓ヲ脱盡シ得ルヲ以テ英國ノ醫博士シエン子ト氏牛痘接種ノ法ヲ發明セシ以還其善感スル者ハ復タ天然痘ニ感スルナシ故ニ此法行ハレテヨリ大ニ患者ノ數ヲ減シ偶々流行スルモ其病性劇惡ニ至ラス殆ント其性ヲ變スルニ至ルヲ証スルニ足ル是故ニ種痘ヲ普及スルハ全ク此病ヲ防盡スル所以ニシテ即チ豫防ノ第一トス

第一項 清潔法

第一條 此病ハ各人感受性ヲ具フル故ニ一般清潔法ヲ要スルモ他病ニ於テ緊要トスルカ如クナラス但患者

ノ居室ヲ清潔ニシ痘漿等ニ汚染セル衣服ヲ屢々更換
シ周圍ノ塵埃ヲ掃除シ専ラ他人ニ傳染スルヲ防クヲ
要スルニアルノミ

第二項 攝生法

第二條 前條ニ載スルカ如ク牛痘ヲ接種シテ其素因ヲ
脱盡スルハ復タ天然痘ニ感スルヲナシ然レモ一回
種ヲ以テ足レリトスヘキニ非ス再三接種シ其善感ノ
確徴ヲ取ラサレヘカラス唯衣服、飲食等ノ攝生ヲ以テ
此病ノ侵襲ヲ豫防スヘキニアラス

第三項 隔離法

第三條 醫師痘瘡ト診斷シタルハ直チニ其家ノ門戶
ニ病名票ヲ貼附スヘシ

但患者治癒又ハ死亡若クハ避病院ニ送致シ其病室
ニ消毒法ヲ行ヒタル後ハ即チ其病名票ヲ去ルヘシ

第四條、痘瘡ノ毒ハ患者ノ身體又ハ其衣服、卧具等ヨリ
傳染シ又患者ニ接近シタル者ノ衣服等ヨリモ傳染ス
ルヲ以テ成タケ患者ニ接近シ又ハ患者ノ用ヒタル衣
服、器具等ニ觸ルヘカラス

第五條 自宅療養ノ患者ハ其室ヲ異ニシ看護人ノ外ハ
成タケ接近スヘカラス曰ムヲ得サル事故アルノ外ハ

他人ト交通ヲ絶チ殊ニ未痘者ヲ近クヘカラス

第六條 家族中ニ於テモ看護人ヲ定メ其他要用アル者ノ外成タケ之ヲ室内ニ入シムヘカラス

但看護人ハ既痘者ニ限ルヘシ

第七條 病室内不用ノ器具ハ勿論殊ニ不用ノ毛布等ヲ置クヘカラス

第八條 患者死亡ノ後其屍傍ニ接近シ并ニ死體ニ沐浴セシムル等ハ爲サ、ルヲ長トス

第九條 縦令輕症ナル患者ト雖モ落痂後一週日ヲ經ルニアラサレハ學校其他衆人群集ノ場所ニ行カシムヘ

カラス

第十條 蚊蠅ハ好テ患者ノ皮膚ニ聚リ頗ル病毒傳播ノ媒介ヲナスモノナレハ病床ニハ常ニ蚊帳ヲ張り蚊蠅及ヒ其他ノ小蟲ヲモ防クヘシ

第十一條 病室ハ消毒ノ後ト雖モ數週間未痘者ヲ入ルヘカラス

但同家内ニ於テ若シ復タ此病ニ罹ル者アルハ此病室ヲ用フルモ妨ケナシ

第十二條 西洋形船舶航海中若シ發病者アルハ其室ヲ異ニシ看護人ノ外他人ト交通ヲ絶ツテ猶ホ人家ニ

於ケルカゴトクスヘシ

第十三條 製造所、會社、學校、旅店等ニ在テ發病シ引取人ナキ者并ニ狹隘不潔ノ地ニ雜居スル者等ニシテ看護消毒法行届カス病毒ノ傳播ヲ防キ難キ者ハ之ヲ避病院ニ送ルヘシ若シ避病院アラサルハ適當ノ空屋ニ移シテ之ヲ隔離スヘシ

第十四條 避病院ノ位置ハ人家ニ接近セス且ツ恆風ノ上ニアラサル地ヲ撰ビ必ス往來繁多ノ路傍等ニ設クヘカラス

但共門前ニ高ク病名標旗ヲ掲クヘシ

第十五條 避病院ヲ新ニ構造スルハ空氣ノ流通ヲ主トシ善美ヲ要セス其牀ヲ高クシ窓戶ヲ開大ニシ且ツ板壁ヲ用ヒテ洗淨ニ便ニシ其屋根ハ板葺苔葺等一時ノ便ニ任シテ可ナリ且ツ其病室ハ濶大ナルヲ要スルヲ以テ凡患者一人ニ二坪半ト見積リ之ヲ建設スヘシ

第十六條 避病院ノ病室ハ重症輕症ノ患者ヲ區別シテ之ヲ分隔シ二坪半ニ患者一人ヲ置クヲ常トシ縱令幅淺スルトモ一坪若クハ一坪半ニ一人ノ割台ヨリ狹クスヘカラス

但此他醫師詰所、事務所、看護人休息所等便宜ニ之

ヲ設ケ且ツ簡易ノ薰蒸室ヲ設クヘシ

第十七條 避病院ノ門側ニハ輕易ナル風呂ヲ設ケ看護人、見舞人等外出ノ時入浴ノ用ニ供スヘシ

第十八條 避病院ハ窓戶ヲ開大ニシ空氣ヲ流通セシメ冬時ハ暖爐ヲ置キ室内ノ溫度ヲ適宜ニシ空氣ノ代謝ヲ助クヘシ

但病室ハ患者治癒死亡ノ後毎回消毒法ヲ施スヘシ

第十九條 避病院ニハ別ニ清淨ナル屍室ヲ設ケ患者若シ死亡シタル尸ハ直チニ此ニ移スヘシ

但屍室ハ親族ノ用者ヲ入ル、カ爲メ其餘地ヲ設ク

ヘシ且ツ其用者ハ成ダケ速ニ來ルノ手續ヲナスヲ要ス

第二十條 尋常病院ニハ決シテ此患者ヲ入ルヘカラス若シ院内ニ從來傳染病室ノ設ケアリテ充分ニ隔離法消毒法ヲ行ヒ得ヘキノ目的アルモノハ入院ヲ許スヘシト雖モ尋常ノ病院ヲ區隔シテ之ヲ用フヘカラス

第二十一條 人家稀疎ノ村落ニ於テハ必シモ避病院ヲ設ルヲ要セス若シ相當ノ空屋アラハ假ニ之ヲ用フヘシ

第二十二條 避病院看護人ノ食數ハ重症ノ患者ニハ一

人ニ一人ヲ附シ輕症ノ者ニハ三人ニ一人ヲ附スル割合ヲ以テ便宜斟酌シ且ツ晝夜交代セシムヘシ

但看護人ハ既痘者ニ限ルヘシ且ツ其表記アル衣服ヲ著セシメ成タケ其人ヲ更換セシムヘカラス

第二十三條 避病院ニ在ル患者ノ親族又ハ別段ノ交誼アル者看護ヲ爲シテ望ムルハ既痘者ニ限り之ヲ許スヘシ但屢々更替スルヲ許スヘカラス

第二十四條 患者ノ親族等一時見舞ヲ爲サント請フルハ之ヲ許スト雖モ成タケ屢々スヘカラス其出ル時ニハ必ス充分ノ消毒法ヲ施スヘシ

第二十五條 流行ノ勢猛烈ナルキハ祭禮、劇場等衆人群集ノ事業ヲ差止メ學校モ成タケ之ヲ閉ツルヲ良トス

第四項 消毒法

第二十六條 此病毒ハ膿漿、痲痘、呼氣、津唾及ヒ死體ヨリ傳染シ又患者ノ衣服、臥具、其他患者ニ接觸セシ器具及ヒ居室等ヨリモ傳染スルカ故ニ甚シク汚染セシモノハ成タケ焼却スヘシ

第二十七條 消毒法ハ其物ニ從テ區別スルヲ左ノ如シ
第一 患者及ヒ看護人等消毒法

第二十八條 患者治癒落痲ノ後一週日ヲ經テ初テ他人

ト交通シ又ハ避病院ヨリ退出ノ節ハ必ス沐浴シ石鹼水ヲ用テ全身ヲ洗ヒ他ノ衣服若クハ消毒法ヲ施シタル衣服ヲ著スヘシ看護人及ヒ患者屍體運搬人並ニ避病院ノ醫師、死體取扱人等ノ他人ニ交接スルキモ亦此法ニ從フヘシ

第二十九條 自宅患者ヲ往診セシ醫師及ヒ患者ノ家人ニシテ直接セサル者親戚朋友ノ一時見舞タル者等ハ石鹼水或ハ醋水ニテ顔面及ヒ手ヲ洗フヘシ

第二 死體及ヒ排泄物等消毒法

第三十條 死體ハ充分ニ稀薄石炭酸水(第二)ヲ浸シタル

二百四十八

單衣若クハ綿布ヲ以テ之ヲ包ミ速ニ棺内ニ歛ムヘシ
第三十一條 死體ハ成タケ火葬セシムルヲ良トス埋葬シタルモノハ其病毒數十年ヲ經ルモ消滅セサルモノトス

第三十二條 西洋形船舶航海中ニ死者アルキハ速ニ濃厚石炭酸水(第一)ニ浸シタル單衣若クハ綿布ヲ以テ之ヲ包ミ假ニ棺内ニ歛メ通常屍室或ハ船中適宜ノ場所ヲ見計ヒ此ニ入レ置キ時々濃厚石炭酸水(第一)ヲ灌注スヘシ

但陸地ニ着スルキハ速ニ其地方ノ警察官吏衛生委

食ニ届出處分スヘシ

第三十三條 落痂及ヒ病室ノ塵埃又ハ患者ニ觸レタル綿、布、紙等ノ斷片ニ至ル迄時々收拾シテ之ヲ燒却スヘシ

第三 衣服卧具等消毒法

第三十四條 患者ノ久ク用ロタル衣服、卧具及ヒ避病院ニ用ヒタル蚊帳ノ甚シク病毒ニ浸染シタル者并ニ避病院ノ卧具、疊、蓆等ハ之ヲ燒却スヘシ

第三十五條 患者ノ著シタル衣服、卧具及ヒ手巾、蚊帳等又ハ死體ニ著セシ衣服等ノ洗濯ニ堪フヘキモノハ之

ヲ桶ニ入レ稀薄石炭酸水(第二)ヲ灌キ浸シ置クテ二十四時間ニシテ更ニ沸湯ヲ注キ四五分時ヲ經ルノ後水ヲ以テ洗淨シ日光ニ曝スヘシ石炭酸等若シ缺乏スルハ熱湯中ニ入レ一時以上之ヲ煮沸スヘシ其洗濯ニ堪ヘサルモノハ品種ニヨリ亞硫酸瓦斯(第九)若ノハ石炭酸蒸氣(第三)ヲ以テ薰蒸シ或ハ熱氣消毒法ヲ行ヒシ後日光及ヒ大氣ニ曝スヘシ

第三十六條 避病院ノ醫師、看護人及ヒ死體運搬人等ノ衣服ニ施スヘキ消毒法ハ前條ニ同シ

第四 家屋船舶等消毒法

第三十七條 患者及ヒ死體ヲ置キタル室ノ疊、簾類ハ之ヲ柱若クハ壁ニ倚セ掛ケ戸棚等ヲ開放シ室内ニアリシ諸器具ハ之ヲ排列シ窓戶ヲ密閉シテ六時乃至八時間亞硫酸瓦斯(第九)ヲ薰シ然ル後窓戶ヲ開キ病毒附着ノ恐アル柱、板敷等ハ稀薄石炭酸水(第三)ヲ撒布シ更ニ之ヲ拭淨シ其他ノ器具ハ石鹼水又ハ沸湯ヲ以テ洗淨シ充分大氣及ヒ日光ニ曝スヘシ避病院ノ病室及ヒ屍室モ亦之ニ倣フヘシ

但金銀器、書畫其他彩色ヲ施セル物及ヒ絹帛等亞硫酸ノ爲メニ其色質ヲ變化スルノ恐アル者ハ初二之

ヲ取除ケ別ニ石炭酸蒸氣(第三)或ハ熱氣消毒法等適宜撰用スヘシ

第三十八條 患者アリタル西洋形船舶ハ其處置尋常ノ家屋ニ大異ナシト雖モ下等客室ニ至テハ衆多ノ乘客皆積荷ノ間ニ枕籍シ幾ント彼我ノ別ナキカ故ニ若シ其中ニ發病者アルキハ満室ノ乘客、積荷、手荷物ハ皆病毒ニ浸染シタル者ト看做シ乘客、手荷物ハ上陸ノ時充分ニ消毒法ヲ行ヒ積荷ハ其儘其室ニ於テ六時乃至八時間亞硫酸瓦斯(第九)或ハ品種ニヨリ石炭酸蒸氣(第三)ヲ薰スルノ後ニ非サレハ陸揚スルヲ許サス

第三十九條 日本形小船ハ前條ヲ斟酌シテ消毒法ヲ行
ヒ海水ヲ以テ普ク船身ヲ洗淨スヘシ

第四十條 避病院或ハ便宜ニヨリ他ノ空屋ヲ借用セシ
者ハ其病室ニ供セシ部分ニ亞硫酸瓦斯(第九)ヲ薰セシ
後稀薄石炭酸水(第三)或ハ亞硫酸溶液(第十)ヲ注キ石鹼
水ヲ以テ洗淨スヘシ

但消毒ノ後モ數週間其内ニ入ルヘカラス且ツ空氣
ヲ流通セシムヘシ

第四十一條 病室ハ不斷換氣法ニ注意スヘシ是亦多少
消毒ノ効アルモノトス

第四十二條 臨時假設ノ避病院ニシテ其保存スヘカラ
サレモノハ流行熄ムノ後之ヲ取毀ツヘシ尤モ其前汚
穢レタル板敷板壁及ヒ柱等ハ濃厚石炭酸水(第二)又ハ
亞硫酸溶液(第十)ヲ以テ充分ニ洗淨シ數日間開放シテ
大氣ニ曝スヘシ

第五 什具運搬器等消毒法

第四十三條 避病院ニ携ヘ來リシ手道具、玩具等ハ治愈
若クハ死亡ノ後亞硫酸瓦斯(第九)蒸薰法ヲ行ハサレハ
之ヲ出スヘカラス

第四十四條 患者及ヒ死體ヲ運搬セシ器具等ハ稀薄石

炭酸水(第二)ヲ灌注シ更ニ石鹼水若クハ沸湯ヲ以テ洗
淨スヘシ其舂舟ノ如キハ海水ヲ以テ洗フモ可ナリ

第四十五條

病室ニ用ヒタル什具、玩具ハ總テ稀薄石炭

酸水(第二)或ハ亞硫酸溶液(第十)ヲ灌キ然ル後石鹼水又

ハ沸湯ニテ洗淨スヘシ其洗フヘカラサレモノハ病室

ニ消毒法ヲ行フノ際其内ニ排列シ濕潤ニ堪フヘキモノ
ハ之ヲ濕スヲ良トス亞硫

酸瓦斯(第九)或ハ石炭酸蒸氣(第三)ヲ以テ一時間之ヲ薰

蒸スヘシ

第四十六條

患者ノ玩弄シタル圖畫、書籍、新聞紙ノ類

ハ之ヲ繙展シ石炭酸蒸氣(第三)若クハ亞硫酸瓦斯(第九)

ヲ薰蒸スヘシ或ハ熱氣消毒法ヲ行フモ可ナリ

第四十七條

醫術器械及ヒ木製、金屬製、陶製、漆製等ノ

諸器ニシテ病毒ニ觸レタルモノハ總テ稀薄石炭酸水

(第三)ヲ以テ洗フヘシ

乙第七十八号

明治十四年六月二日

本年第三十二号公布並ニ内務省乙第廿五号達ノ趣モ有

之候付賣藥請賣並行商鑑札ノ類ハ自今各郡區役所ニ於

テ從前ノ雛形ニ照準調製シ該鑑札面ニハ郡區役所名ヲ

記入押印下附可致此旨相達候事

乙第八十二号

明治十四年六月十日

郡區役所

町村衛生委員

本年^四月當縣乙第六十號ヲ以テ相達候痘種痘人食表之中初
種之部二年以下ノ次へ三年以下ノ欄ヲ挿入候條此旨相
達候事

乙第百三十六號

明治十四年九月二十八日

明治十三年^九月當縣乙第百四十二號達衛生事務取扱手續
左之通改正候條此旨相達候事

第四條 改正

製藥ノ多寡賣藥ノ増減等ヲ取調每半年度及毎一年

度ノ統計表ヲ製シ進達スル事

第五條 改正

町村衛生委員ヨリ出ス死亡届并諸表ヲ取纏メ毎半
年度及毎一年度ノ統計表ヲ製シ進達スル事

第六條中取纏メノ下へ(毎一年度)ノ四字ヲ増加

第七條 改正

郡區ノ地形及風土ノ寒暖燥濕恒風人烟ノ疎密居民
ニ概ノ貧富常食習慣職業ヲ取調且死亡ノ多寡何病
ノ流行シ或ハ特ニ多キ所以等考按ヲ附シ每半年度
諸表ニ副へ開申スル事

(別冊)

土木費支辦法

第壹條

河港道路堤防橋梁扒樋等渾テ公共ノ利害ニ關ル治水修路ノ工事ハ地方稅ヨリ第貳條以下各條ノ步合ヲ以テ支辨スルモノトス其他ハ地元町村若クハ組合町村ノ協議費タルヘシ

第貳條

國道及ヒ之レニ架スル橋梁工事ハ皆地方稅ヲ以テ支辨スルモノトス

二百五十六

第三條

縣道及ヒ之レニ架スル橋梁工事ハ地方稅九分協議費壹分ヲ以テ支辨スルモノトス

第四條

木曾川 鍋田川

右二川ノ工事ハ地方稅八分五厘協議費一分五厘ヲ以テ支辨スルモノトス

第五條

佐屋川 矢作川 豊川

右三川ノ工事ハ地方稅八分協議費貳分ヲ以テ支辨スル

モノトス

第六條

後川 日光川 庄内川 矢作古川
乙川 間ノ川

右六川ノ工事ハ地方稅七分五厘協議費貳分五厘ヲ以テ
支辨スルモノトス

第七條

音羽川 梅田川 天白川 新川
五條川 矢田川 境川 内津川

右八川ノ工事ハ地方稅七分協議費三分ヲ以テ支辨スル

モノトス

第八條

第四條第五條第六條第七條ニ掲載スル所ノ拾九川ヲ除
キ其他ノ川々工事ハ總テ地方稅五分協議費五分ヲ以テ
支辨スルモノトス

第九條

變田港ノ工事ハ皆地方稅ヲ以テ支辨スルモノトス

第十條

水源土砂扞止ノ工事ハ地方稅九分協議費壹分ヲ以テ支
辨スルモノトス

第十一條

海岸汰除堤防工事ハ地方税七分協議費三分ヲ以テ支辨スルモノトス

但新設及歛下年季中ニ屬スルモノハ此限ニ非ス

第十二條

榎類拾坪以上ノ工事ハ木材鑛物指立代金ニ限り地方税伏方ハ協議費ヲ以テ支辨スルモノトス

第十三條

里道ニ架スル橋梁平坪六坪以上ニ及フモノハ架換工事ニ限り地方税八分協議費貳分ヲ以テ支辨スルモノトス

第十四條

市街ヲ爲シタル道路ノ工事ハ國縣道ニ限り地方税五分協議費五分其他ハ地方税貳分協議費八分ヲ以テ支辨スルモノトス

第十五條

前條々ノ如ク土木費支辨ノ方法ヲ立ルト雖モ利害直接ニ關セサル從來受持町村ナキ工事ハ皆地方税トシ又實際民力ニ堪ヘ難キ莫太ノ協議費ヲ要スル工事ハ實地檢査ノ上地方税ノ内ヨリ幾分カ補助スルヲ得ルモノトス

第十六條

前條ヤノ工事ト雖モ新設及ヒ變更ニ屬スルモノハ此分
合ノ限リニアラス

第十七條

堤上樹木及道路並木植繼或ハ新規植立費ハ皆地方稅ヲ
以テ支辨スルモノトス

第十八條

里程標建設費ハ皆地方稅ヲ以テ支辨スルモノトス

甲第九十三號

明治十四年五月十九日

本年太政官第二十六號ヲ以テ賣藥規則中加除公布相成
候處其請賣者ニ於テ仮令營業者之藥方分量ヲ傳ハルト

雖私ニ之ヲ調製スル儀ハ不相成候條心得違無之様可致
此旨布達候事

乙第六拾壹號

明治十四年五月三日

明治十二年當縣乙第八拾貳号ヲ以テ河港道路橋梁其他
民費修繕一村限金高帳及總計帳共編製方之儀相達置候
處今般内務省乙第二十號達之趣有之候條自今有每費額
ノ内譯ニ區町村會及水理士功會ニ於テ議定シタル經費
及會議ニ付セサル自費之分各區別明記可致此旨相達候
事

乙第八十八號

明治十四年六月廿七日

本年第貳拾四號公布ニ據リ區町村會若クハ水利土功ノ
集會ニ於テ評決シタル土木費ノ急納者ハ郡區長ニ於テ
處分シ本廳へ報告可致此旨相達候事

乙第百三十號

明治十四年九月十五日

去明治十三年一月當縣乙第十四號達村受工事土木費下
渡方左之通更正候條此旨相達候事

一 工事着手ノ后一ト廉限仕譯書ヲ以請求ノ分土木費全
額ノ五分

一 出來形帳進達ノ上殘額五分

乙第百六十三號

明治十四年十月廿九日

道路並木枯損木之内橋梁適應ノ品ハ其工事ニ可相用義
モ可有之ニ付貳尺廻リ以上ニシテ用立可キ見込ノモノ
ハ寸尺取調一應土木課へ通報ノ上處分可致此旨相達候
事

乙第百八十九號

明治十四年十二月九日

隄塘使用料ノ義ニ付明治十一年^九乙第五拾八號本年^七月
乙第三拾五號同年^九乙第四拾六號ヲ以テ内務省ノ達シ
ニ因リ十四年度以降隄防地盤ノ官民有ニ拘ラス使用地
ノ修繕地方稅負擔^{本年五月甲第九十二號當縣達土木費支辦法ニ因}
^{リ工費歩通り五分以上連帶支辨スヘキ箇所ヲ云}ニ係ル
者ハ地方稅ニ合セ土木費ニ支用可致義ニ付右使用料ハ

直ニ本廳會計課へ上納シ協議費負擔ニ係ル使用料ハ自
今郡區役所ニ徵收シ協議費支出ノ町村へ下渡隄塘修繕
費ニ充シメ明治十二年乙第百八拾貳號當縣達ニ準據明
記可致尤其年度中協議費支出ノ修繕費無之節ハ翌年度
ニ可操越義ト可相心得此旨相達候事

○郡事

甲第五號

明治十四年一月十七日

明治十二年一月當縣甲第壹號布達戶長取扱條件第四項左
之通更正候條此旨布達候事

二百六十一

一訴訟ニ係リ本人病氣至親無之代人相立候節証書ヲ與
フ事

甲第十一號

明治十四年一月廿六日

本年當縣甲第五號布達戶長取扱條件第四項左ノ通更正
候條此旨布達候事

一詞訟ニ係リ病氣事故等ニテ代人相立候節公證ヲ與フ
事

甲第十六號

明治十四年一月廿七日

明治十二年當縣甲第七十七號同第百四十號布達郡區長
委任條件追加第八十七項左之通更正候條此旨布達候事